12『降りそそぐ百万粒の雨さえも』成井豊＋真柴あずき

○ジャンル／時代劇
○ストーリー／慶応４年（１８６８年）１月、鳥羽伏見の戦いに敗れた新選組は、船で江戸へ向かう。副長・土方歳三は江戸での再起を叫ぶが、隊士は半減。沖田総司も労咳が悪化し、千駄ヶ谷にある植木屋の離れで静養することに。もはや池田屋草堂の頃の勢いはどこにもなかった。一番隊士・立川迅助は、沖田の世話係として、新選組の屯所と植木屋を往復していた。ある日、迅助の幼馴染み・昭島捷平が、彼を訪ねて屯所へやってくる……。
○出演者／男８＋女４＝計１２
○上演時間／１２０分

登場人物

立川迅助（新選組隊士）
沖田総司（新選組隊士）
土方歳三（新選組副長）
三鷹銀太夫（新選組隊士）
昭島捷平（新選組隊士）
室戸策太郎（土佐藩士）
清水旋六（土佐藩士）
須崎弓兵衛（土佐藩士）
みい（ときの姪）
とき（植木屋の妻）
沖田ミツ（沖田の姉）
昭島佐織（昭島の妻）

慶応四年一月十五日早朝、幕府の軍艦・富士山丸の甲板。
沖田総司が空を見ている。そこへ、立川迅助がやってくる。

迅助　沖田さん、探しましたよ。
沖田　見てください、立川さん。（指差して）あの空。
迅助　うわー、きれいな蜜柑色ですね。まだ熟しきってない、若い蜜柑だ。
沖田　もうすぐ日が昇ってくるんですよ。あのすぐ下に、太陽があるんです。
迅助　何だか、わくわくしますね。俺、海の上で日の出を見るの、生まれて初めてです。
沖田　私だって、そうですよ。
迅助　うー、寒い。日の出もいいけど、ここはちょっと寒すぎます。船室に戻りませんか？
沖田　いや、もう少し、ここにいさせてください。今朝は大分、気分がいいんです。
迅助　でも、体を冷やすと、また後で熱が。
沖田　ほんの少しだけですから。それより、凄いですね、この船。
迅助　富士山丸ですか？
沖田　これだけ大きな船になると、ほとんど揺れないんですね。さすがは、幕府の軍艦だ。

迅助　この船なら、アメリカだって、ヨーロッパだって、行けると思いますよ。
沖田　ヨーロッパか。京にいた頃は、考えたこともなかったな。毎日毎日、敵と戦うことで精一杯だったから。
迅助　俺だって、そうですよ。
沖田　おかしなものですね。京にいたのはたったの五年なのに、十年も二十年も過ぎたような気がします。

そこへ、三鷹銀太夫がやってくる。

銀太夫　二人とも、ここで何をしているんです。寒くないんですか？
沖田　寒いです。でも、日の出が見たくて。
銀太夫　またわがままを言って。立川さん、なぜ止めなかったんです。あなた、沖田さんの世話係でしょう？
沖田　立川さんを責めないでください。私は黙って船室を出てきたんです。
迅助　（銀太夫に）目が覚めたら、沖田さんの姿が消えていて。それで、慌てて船の中を探し回ったんです。
銀太夫　でも、今は？　二人でボーっと立ってたじゃないですか。（沖田の手を握って）なんてことだ。氷みたいに冷たくなっている。（迅助に）沖田さんにもしものことがあったら、あなたの責任ですからね。
迅助　縁起でもないことを言わないでください。
沖田　三鷹さん、手を離してもいいですか？
銀太夫　でも、まだ温まってません。
沖田　（手を離して）いいえ、もう十分です。それより、三鷹さんはなぜここへ？

銀太夫　朝の散歩ですか？
迅助　違いますよ。逃げてきたんです。近藤先生の鼾から。
銀太夫　え？　でも、近藤先生は一人部屋でしたよね？
　そうですよ。でも、壁を通して、聞こえてくるんです。

そこへ、土方歳三がやってくる。

土方　何だ、おまえら。今朝はずいぶん、早いじゃねえか。
銀太夫　土方先生も、鼾から逃げてきんですか？
土方　ん？　今、なんて言った？
銀太夫　（大声で）鼾から逃げてきたんですか？
土方　おっと、耳栓を外すのを忘れてた。（と耳栓を外して）総司、今朝は具合がよさそうだな。
沖田　おかげさまで。土方さんは朝の散歩ですか？　それとも、一句捻りに？
土方　からかうんじゃねえ。もうすぐ江戸に着くかと思うと、目が冴えちまってな。
沖田　また忙しくなりますね。屯所を確保して、新しい隊士を募集して。
土方　おまえは余計な心配をするな。船を降りたら、まっすぐ神田の医学所へ行くんだ。
銀太夫　松本良順先生の所ですね？　それなら、安心だ。
沖田　私はあの人は苦手だな。人の顔を見るたびに、「病人は寝てろ」って言うんだから。
土方　それはおまえがフラフラ歩き回るからだ。おかげで、伏見の戦の時は、立つこともできなかったじゃねえか。

沖田　すみませんでした。何の役にも立たなくて。

土方　謝ることはねえ。おまえがいたところで、結果は変わらなかった。こっちは刀、向こうは鉄砲。まるで子供と大人の喧嘩だった。

銀太夫　ひどい戦でしたね。鉄砲の玉が何度も顔をかすめて。こうして生きていることがいまだに信じられません。

土方　しかし、勝負はまだついてねえ。江戸に着いたら、すぐに鉄砲の訓練を始めるぞ。

銀太夫　それはつまり、今度は江戸で戦うと？

土方　当たり前じゃねえか。なぜそんなことを聞く。

銀太夫　それは……。

土方　何だ。言いたいことがあるなら、はっきり言え。

銀太夫　土方先生、我々新選組は、伏見の戦で多くの隊士を失いました。井上源三郎さん、山崎烝さん、それにあの口の悪い小金井兵庫さんも。

迅助　兵庫は死んでませんよ。俺はあいつの亡骸を見てませんから。

銀太夫　もしそうだったとしても、大坂城には辿り着かなかった。生き残った隊士は、わずか四十人余り。しかも、慶喜公は、再戦を誓われたその日に、我々を置いて、江戸へ帰られた。最早、戦う意思がないとしか思えません。

土方　だから、諦めろと言うのか。俺たちが諦めたら、誰が幕府を守るんだ。

銀太夫　しかし、慶喜公はとっくに大政を奉還されていますし。

土方　そこだ、三鷹。徳川家はもはや一介の大名に過ぎない。それなのに、薩長のやつらは戦を仕掛けてきた。天下を牛耳るためには、徳川家が邪魔だからだ。安土桃山の時代じゃあるまいし、そんな横暴が許されると思うか？

銀太夫　しかし、ヤツらは帝から錦の御旗を賜った。すなわち、官軍となったのです。

土方　それがどうした。俺たちは、俺たちの信じる道を進むだけだ。
沖田　つまり、あくまでも幕府を守るんですね？
土方　官軍だか何だか知らねえが、所詮は薩長の寄せ集めじゃねえか。江戸にはフランス式の訓練を受けた鉄砲隊もいる。軍艦だって手つかずで残ってる。力はこっちの方が上なんだ。もう一度やれば、必ず勝てる。
銀太夫　それはそうかもしれませんが……。
迅助　見てください、土方先生。日が昇ってきました。

全員が空を見つめる。

土方　勝負は江戸に帰ってからだ。本当の戦は、まだ始まっちゃいねえ。

全員が去る。

銀太夫がやってくる。日誌を開く。

銀太夫　慶応四年一月十五日、我々新選組を乗せた富士山丸は品川港に到着。近藤先生と沖田さんは、神田の医学所へ行き、そこで療養することになった。残りの隊士は鍛冶橋にある、若年寄の役宅へ。そこが幕府から与えられた、新しい屯所だった。

慶応四年一月二十一日昼。丸の内にある、新選組屯所。
迅助がやってくる。

迅助　三鷹さん、私に用と言うのは？
銀太夫　来客ですよ。昭島捷平という人ですが、ご存じですか？
迅助　捷平がここに来たんですか？　今、どこにいるんです。
銀太夫　慌てないでください。今、お呼びしますから。昭島さん、お入りください。

そこへ、昭島捷平がやってくる。

迅助　捷平！

昭島　久しぶりだな、迅助。
迅助　よく来てくれたな。俺の手紙、いつ届いた？
昭島　昨日だ。江戸に戻ってきたと知って、無性に顔が見たくなって。
迅助　おまえは全然変わらないな。
昭島　そう言うおまえは、少し目つきが鋭くなったな。そのせいか、男振りが上がった気がする。
銀太夫　それは褒めすぎじゃないですか？　私には相変わらずボーっとしているように見えますけど。
迅助　捷平、こちらは勘定方の三鷹さん。俺が新選組に入隊した時から、ずっとお世話になっている人だ。
銀太夫　昭島さんでしたよね？　立川さんとはどのようなご関係で？
昭島　幼馴染みです。両国の回向院の裏に、さみだれ長屋というのがありましてね。私も迅助も、そこで育ったんです。
銀太夫　子供の頃の立川さんは、いじめられっ子だったと聞きましたが。
迅助　ええ。だから、捷平にはずんぶん助けてもらいました。こいつは喧嘩が強いし、頭もいいし。私は何をやってもかないませんでした。家柄だって、私の父はただの浪人でしたが、捷平の家は関ヶ原の頃から続く御家人で――

そこへ、土方がやってくる。

土方　立川、神田の医学所まで行ってくれ。差し入れを頼みたい。
迅助　わかりました。捷平、悪いけど、仕事なんだ。すぐに戻ってくるから――
昭島　失礼ですが、土方先生でいらっしゃいますか。

土方　見かけない顔だな。入隊希望か。
銀太夫　違いますよ、土方先生。この人は立川さんの幼馴染みで――――
昭島　（土方に）ご推察の通りです。本日は新選組のお仲間に加えていただきたく、参上仕りました。
迅助　え？　そうだったのか？
昭島　（土方に）私、昭島捷平と申します。我が昭島家は先祖代々将軍家にご奉公して参りましたが、三年ほど前にお役御免となり、今は浪々の身であります。
迅助　何だって？　本当か？
昭島　土方先生、今や、江戸の武士たちは真っ二つに分かれています。薩長軍と戦うか、それとも恭順するか。しかし、恭順を主張する者の多くは、単に我が身を守ろうとしているだけ。今こそ将軍家のご恩に報いるべき時なのに、命を惜しむなど、言語道断です。
土方　そいつは俺も同感だな。
昭島　ところが、新選組は違う。伏見の戦では、幕府軍の先頭に立って、戦ったとか。私の命をぜひとも新選組でお使いください。憚りながら、剣には多少の自信があります。必ずや、先生方のお役に立ってみせます。
土方　剣術ができても、役に立つとは限らねえ。剣の時代は終わったんだ。
昭島　どういう意味でしょう。
土方　言った通りさ。これからは鉄砲と大砲の時代だ。俺がほしいのは、剣術より砲術のできる人間だ。
昭島　恐れながら、新選組副長のお言葉とは思えません。
土方　何だと？
昭島　確かに、大軍同士の戦いでは、鉄砲と大砲が有効でしょう。が、剣は武士の

魂とも言うべきもの。それを簡単に捨ててしまってよいのでしょうか。

迅助　おい、捷平！

土方　（昭島に）誰が剣を捨てると言った。戦の最後は白兵戦だ。その時、物を言うのは剣だ。

昭島　ならば、私を白兵戦にお使いください。技量をお疑いでしたら、ここにいる立川に聞いていただければ———

土方　三鷹、木刀を持ってこい。そいつの分と、立川の分だ。

銀太夫　え？　その人と立川さんに試合をさせるんですか？

土方　どれほどの腕か、見せてもらおうじゃねえか。早くしろ。

三鷹が去る。

迅助　土方先生、昭島は神道無念流の免許皆伝です。私なんかに勝てるわけありません。

土方　情けないことを言うな。おまえは総司の弟子だろうが。

昭島　総司というのは、沖田総司先生ですか？

迅助　そうだよ。俺は一番隊の所属で、いつも稽古をつけてもらっていたんだ。

昭島　凄いじゃないか。さぞかし腕を上げたんだろうな。

土方　立川は京で数々の修羅場を潜ってきた。甘く見ると、痛い目に遭うぞ。

迅助　いや、痛い目に遭うのは、間違いなく私です。

三鷹が戻ってくる。木刀を二本持っている。それぞれ、迅助と昭島に渡す。

銀太夫　（迅助に）あなたは新選組の代表として、戦うんです。負けたら、腹を切ってもらいますからね。

迅助　そんな。

迅助と昭島が木刀を持って向かい合う。

土方　恨みっこなしの一本勝負だ。始め。

迅助が打ち込む。昭島がかわす。昭島が打ち込む。迅助がかわし、即座に打ち返す。昭島がギリギリでかわす。

昭島　驚いたな。今のをかわすとは。

迅助　捷平、私語は慎め。

昭島が打ち込む。迅助がかわす。迅助が打ち込む。昭島がかわし、即座に打ち返す。迅助が受けて、昭島を突き飛ばす。

昭島　土方先生の仰る通りだ。三年前とは別人だ。

迅助　黙れ！

迅助が打ち込む。昭島がかわす。昭島が打ち込む。迅助がかわし、即座に打ち返す。昭島がかわし、打ち返す。迅助が受けるが、後ろに転がる。

土方　それまで。
銀太夫　（迅助に）情けない。あなた、それでも新選組の代表ですか。
昭島　いや、勝負は確かに私の勝ちでしたが、剣の技量に差はなかった。見直したぞ、迅助。
銀太夫　許せないなあ、そのわざとらしい謙虚な態度。私は立川さんのことはあまり好きじゃないけど、同じ釜の飯を食ってきた仲間です。バカにしたら、許しませんよ。
昭島　私はバカになんかしてませんよ。
銀太夫　いいえ、しました。確かに、立川さんの剣は今一つかもしれない。しかし、池田屋の時も、蛤御門の時も、伝令として大いに活躍したんです。
迅助　私はただ走り回っただけですよ。
銀太夫　走ることだって、立派な仕事です。立川さんほど足の速い人は、日本中探したって、見つかりませんよ。
迅助　それが、目の前にいるんです。
銀太夫　え？
迅助　さっき、捷平には何をやってもかなわないと言いましたよね。走ることも、その一つなんです。私の足が速くなったのは、いつも捷平と走り回っていたからなんですよ。
土方　立川より速い男か。おもしろい。
銀太夫　土方先生、まさか。
土方　昭島と言ったな？　いつから参加できる。
昭島　今日からでも。すぐに荷物をまとめてきます。

土方が去る。三鷹が木刀を持って去る。
昭島宅。
昭島佐織がやってくる。風呂敷包みを持っている。

佐織　それじゃ、今夜から屯所に泊まるんですね？
昭島　ああ。屯所と言っても、元は若年寄の役宅で、ずいぶん立派な屋敷だった。新選組は、よほど幕府に頼りにされているらしい。なあ、迅助。
迅助　（昭島と佐織を見ている）
昭島　どうした、迅助。何をボーッとしている。
迅助　いや、本当に夫婦になったんだなと思って。
佐織　いやだわ。もう三年も前の話ですよ。
迅助　佐織さんから文をもらった時、やっぱりって思ったんです。二人は子供の頃から、お似合いだったし。おめでとう、捷平。おめでとう、佐織さん。
佐織　ありがとう。
迅助　幸せそうで、本当によかった。でも、なぜ知らせてくれなかったんです。捷平がお役御免になったこと。
昭島　俺が知らせるなと言ったんだ。余計な心配をさせたくなくて。
迅助　一体何があった。また、癇癪玉を破裂させたのか？
佐織　さすがは迅助さんですね。何もかもお見通し。
昭島　うるさい。
佐織　（迅助に）この人、あなたが京へ行った後、幕府の鉄砲隊に志願したんです。あなたが新選組に入ったと聞いて、自分も何かしたいと思ったのね。でも、たったの一月で刃傷沙汰を起こして。

迅助　相手の怪我は？

佐織　重傷が一人、軽傷が四人。

迅助　ということは、五人を相手に大立ち回りか。で、物の見事に勝ったわけだ。

佐織　ところが、その重傷っていうのが、旗本のご子息でね。お父上はなんと今の寺社奉行。子供の喧嘩に親がしゃしゃり出てきて、この人はあっさりお役御免というわけ。

迅助　そいつは運が悪かったな。（昭島に）子供の頃から何度も言ってきただろう？喧嘩する時は相手を選べって。

昭島　先に手を出してきたのは、向こうの方だ。

佐織　それは、あなたが余計なことを言ったからでしょう？

昭島　余計じゃない。フランス式の軍隊は、何よりも規律を尊ぶ。一人一人の隊士が規律で一体となることによって、初めて大きな力を生み出すんだ。それなのに、鉄砲隊のやつらはわがままばかり。眠いだの疲れただのと不平を並べて、動こうとしない。特にひどいのが、身分の高いやつらだ。

迅助　旗本の子供は甘やかされて育つからな。

昭島　ある日、五人に囲まれて、隊を辞めろと言われた。おまえは隊の規律を乱していると。冗談じゃない。規律を乱しているのはどっちだ。そう言い返したら、いきなり斬りかかってきた。売られた喧嘩は買うのが男だ。で、本当に隊を辞めさせられたというわけだ。

迅助　だから、新選組に入ろうと思ったわけか。

佐織　いろいろと迷惑をかけると思うけど、この人のこと、よろしくお願いします。

迅助　いや、捷平なら大丈夫ですよ。学問はできるし、剣は強いし。土方さんもすっかり気に入ったようです。

佐織　（昭島に）たまには帰ってこられるんでしょう？
昭島　当分は無理だろう。何かあったら、屯所に来い。
佐織　わかりました。行ってらっしゃい。（と風呂敷包みを渡す）
迅助　いいな。いかにも、心の底から惚れ合ってる夫婦って感じだな。
佐織　茶化さないでよ、迅助さん。
迅助　いや、俺はうれしいんですよ。二人の仲がよくて。
昭島　本当は悔しいんじゃないのか？　俺と佐織が夫婦になって。
迅助　どうしてだ？
昭島　とぼけるなよ。おまえも佐織のことが好きだったんだろう？
迅助　ああ、大好きだった。だから、佐織さんが幸せになったことが、うれしくて仕方ないんだ。
昭島　（佐織に）それじゃ、行ってくる。
佐織　気をつけて。

迅助・昭島が去る。反対側へ、佐織が去る。

慶応四年二月二十日昼。千駄ヶ谷にある、植木屋・柴田辰次郎宅の離れ。
とき・辰次郎がやってくる。

とき　みい？　みいはいるかい？

そこへ、みいがやってくる。

とき　いるなら、すぐに返事をしなよ。全く愛想のない子だね。
辰次郎　まあまあ。（みいに）掃除はもう終わったのか？
みい　（うなずく）
辰次郎　だったら、少し話がある。そこに座れ。

みい・辰次郎・ときが座る。

辰次郎　話っていうのは、今日からこの離れで暮らすことになったお人のことだ。実は、ときが医学所で、妙な噂を聞いてきてな。
とき　（みいに）おまえには、若いお侍だって言ったよね？　私も良順先生からは、子供好きで、気立ての優しい人だって聞かされた。だから、気安く引き受け

たんだけど、そいつはどうも嘘だったらしい。私はとんだババをつかまされちまったんだよ。

みい　ババ？

辰次郎　けつの穴から出る、固い物のことだ。たまに、柔らかいけどな。

とき　いちいち説明しなくていいんだよ。（みいに）で、そのお侍のことだけどね、なんとまあ、あの新選組の隊士なんだってさ。

みい　新選組？

辰次郎　新選組っていうのは、京で市中警護をしていた、侍の集まりだ。一月の戦で官軍に負けて、江戸に逃げてきた。今は、上野の寛永寺に蟄居された将軍様の警護をしてる。

とき　（みいに）京にいた時は、幕府に逆らう浪人たちを片っ端から殺してた。それはそれは物騒なやつらなんだよ。中でも、飛び抜けて物騒なのが、沖田総司って男でね。そいつが殺した浪人の数は、十人じゃきかないらしい。

辰次郎　（みいに）ここまで聞けば、話のオチはわかるだろう。おまえがお世話をすることになったのは、その沖田なんだ。

みいが立ち上がって、逃げ出そうとする。

辰次郎　小遣いをやる。

みい　（立ち止まる）

辰次郎　菓子を買ってやる。着物を買ってやる。月に一度は芝居に行かせてやる。

とき　芝居はさすがに贅沢じゃないかい？

辰次郎　良順先生には祖父さんの代からお世話になってるんだ。今さら、断るわけに

は行かねえ。（みいに）いくら物騒なやつでも、今はただの病人だ。いきなり斬りかかっては来ないだろう。だから、頼む。

そこへ、熊吉がやってくる。後から、迅助・沖田・ミツがやってくる。

熊吉　親方、お客さんがいらっしゃいました。
とき　あら、もう？
迅助　失礼します。
辰次郎　お待ちしてました。こちらにお座りください。

迅助・沖田・ミツ・熊吉が座る。

ミツ　お初にお目にかかります。私、沖田総司の姉の、ミツと申します。この度は、弟がご面倒をおかけします。
辰次郎　ご丁寧にどうも。私は植木屋の辰次郎、こいつは女房のときです。ええと、沖田様はどちらで？
沖田　私です。こちらは私と同じ新選組隊士で、立川迅助さん。
迅助　（辰次郎・ミツに）沖田さんのこと、くれぐれもよろしくお願いします。
とき　どうか、ご心配なく。沖田様の身の回りのお世話は、ここにいるみいがいたしますので。
辰次郎　（沖田に）こいつは私の兄の娘なんですが、九つの時に、火事で二親を失くしましてね。で、私どもが引き取ったというわけで。
とき　（沖田に）愛想は悪いけど、よく働く子です。何でも言いつけてやってくだ

さい。

沖田　わかりました。（みいに）よろしく、みいさん。

ミツ　（風呂敷包みを差し出して）みいさん、ここに着替えが入っています。慌てて拵えたものだから、縫い目がひどいの。あんまりじっくり見ないでくださいね。

みい　（受け取って、中を見て）うわ、本当にひどい。

ミツ　だから、見ないでって言ったのに。

辰次郎　申し訳ありません。十七にもなるのに、礼儀知らずで。

ミツ　（笑って）それぐらいの方が、総司にはいいかもしれません。三人兄弟の末っ子で、甘やかされて育ちましたから。

沖田　そんなの、赤ん坊の頃の話じゃないですか。私は家にいたのは、九つの歳までですよ。

とき　里子にでも出されたんですか？

沖田　違いますよ。試衛館という道場に、内弟子として入門したんです。

辰次郎　なるほどね。たったの九つで、将来は剣術で身を立てようと。

ミツ　そう言えば聞こえはいいんですが、実際は口減らしのためです。私たちの父はこの子が生まれてすぐに亡くなりました。沖田家には他に稼ぎ手がいなかったので、私が婿養子を迎えたんですが、家族五人が暮らしていくのがやっとで。

沖田　姉上、やめましょう。会ったばかりの方々にする話じゃありません。

熊吉　え？　おいらはもっと聞きてえな。

辰次郎　熊吉、おまえ、まだそこにいたのか。

熊吉　だって、沖田様とは、これから毎日、顔を合わせるんですよ。どんなお人か、

沖田　知っておきたいじゃねえですか。
熊吉　熊吉さん、私を沖田様と呼ぶのはやめてもらえませんか。他の皆さんも。
沖田　どうしてですか？
熊吉　そんなふうに呼ばれるのは慣れてなくて。どうにも落ち着かないんです。
沖田　じゃ、沖田。これでいいですか？
熊吉　呼び捨てはちょっと。
辰次郎　じゃ、沖田ちゃん。
ミツ　熊吉、おまえは口を閉じてろ。ミツさん、続きを聞かせてください。
熊吉　ええと、どこまで話したかしら。
ミツ　口減らしのところまでです。
　　そうそう。それで、近藤周斎先生、新選組局長・近藤勇先生のお父上の道場へ行かせたんです。名目上は内弟子でしたが、剣術の稽古はほんの少し。掃除、洗濯、風呂の釜炊き。朝から晩まで、コマネズミのように働かされて、九つの子にはさぞ辛かったろうと思います。
沖田　そんなことはありません。周斎先生はとても優しい人だったし、近藤さんや土方さんは、私を弟のようにかわいがってくれたし。
とき　土方さんていうのは、新選組の副長の、鬼より怖いって評判の？
迅助　確かに隊務の時は怖いけど、根は優しい人ですよ。沖田さんのことだって、他の誰よりも気にかけてるし。ここへ来ることになったのも、土方先生が「もっと静かな所へ行け」って言い出したからで。
辰次郎　沖田さんは、どこがお悪いんですか？　静かな所がいいってことは、心の臓ですか？
迅助　いや、私は胃の腑の病だと聞きましたが。

沖田　違いますよ、立川さん。私は胸を患ってるんです。
みい　胸を？
迅助　どうしたんです。いきなり素っ頓狂な声を出して。
とき　この子も胸の病だったんですよ。十二の時。
沖田　みいさんも？
とき　咳が何日も止まらないんで、良順先生に診てもらったんです。そうしたら、労咳になりかけている。おとなしくしてないと、大変なことになるって。
ミツ　それで、今は大丈夫なんですか？
とき　ええ、すっかり。
ミツ　本当ですか？
辰次郎　幸い、気づくのが早かったんで。それでも、三月ぐらいは寝込んでたんじゃないですかね。
ミツ　そうですか。それは本当に幸いでしたね。
みい　私、運が強いんです。火事の時も、私だけ生き残ったし、近所の子と木登りをして、地面に落ちた時も、傷一つ負わかなかったし。
迅助　それは、体が丈夫なだけでは。
みい　丈夫な体に生まれたのも、運のうちです。どんなにひどい目に遭っても、私は大丈夫。絶対に何とかなるんです。
とき　あんた、何が言いたいんだい？
みい　だから、沖田さんも大丈夫です。私がついていれば、きっと元気になります。
沖田　本気で言っているんですか？
みい　ええ。おかしいですか？
沖田　いいえ、別に。ただ、ちょっと変わってると思っただけで。

辰次郎　すみませんね、ちょっと変わってて。でも、けっして悪気はないんです。
ミツ　みいさんは優しい人ですね。あなたになら、安心して弟が預けられます。
辰次郎　こちらの方こそ、弟さんが優しそうな方が安心しました。なあ、とき？
とき　ええ。私はてっきりババをつかまされたのかと。
迅助　ババ？
辰次郎　説明は後で。

そこへ、虎三がやってくる。米俵を担いでいる。

虎三　親方！　親方！
辰次郎　虎三、何だ、その米俵は。
虎三　たった今、届いたんですよ。宛て先は沖田総司様。送り主は土方歳三様。
迅助　引っ越し祝いだ。（沖田に）その米を腹一杯食べて、早く元気になれってことですよ。
沖田　全く、あの人はやることが派手なんだから。
虎三　熊吉、運ぶのを手伝ってくれ。表にまだ七俵あるんだ。
熊吉　よし来た。全部で八俵か。末広がりは縁起がいいぜ。
ミツ　私もお手伝いしましょう。
とき　いいえ、こういうことは若い者が。
ミツ　若い者？　だったら、私も入るじゃありませんか。

迅助・とき・ミツ・辰次郎・熊吉・虎三が去る。

沖田　（表を見て）桜だ。ここの庭は桜でいっぱいですね。春が来るのが楽しみだな。

みい　殺してないですよね？

沖田　え？

みい　沖田さんは人を殺したことなんか、ないですよね？

沖田　いいえ、ありますよ。何人も。数えきれないほど。

みいが走り去る。沖田も去る。

慶応四年二月二十五日昼。新選組屯所。
銀太夫がやってくる。懐から手紙を取り出す。

銀太夫　近藤先生、私・三鷹銀太夫は、一身上の都合により、新選組を退職させていただきます。これ、退職願です。それでは失礼します。こんなに簡単に済むわけないよな。近藤先生は私を呼び止めるはずだ。え？　辞めるなら、切腹しろ？　違いますよ、近藤先生。私は辞めるんじゃなくて、分かれるんです。伊東甲子太郎先生のように、新選組から分かれて、別の場所で活動するんです。別の場所とは、私の生まれ故郷の南部盛岡。そこに、新選組南部盛岡支部を作って、一人でコツコツと。え？　作らなくていい？　近藤先生は、私の故郷が薩長のやつらに踏みにじられるのを、黙って見ていろと仰るんですか？　その前に、江戸を守れ？　それは私なんかがいなくても、近藤先生や土方先生がいらっしゃれば大丈夫でしょう。その通りだ？　おまえなんかがいなくても大丈夫だ？　だから腹を切れ？　ダメだ。この流れだと、どうしても私は死ぬことになる。まずいぞまずいぞ。

そこへ、迅助がやってくる。

迅助　ただいま戻りました。
銀太夫　（手紙を懐に入れて）お帰りなさい。また千駄ヶ谷へ行ってきたんですか？
迅助　ええ。三鷹さん、今、何か隠しませんでした？
銀太夫　別に。それより、沖田さんはどうでした？　少しは元気になっていましたか？
迅助　私の前では、明るく振る舞っていましたが、ときさんの話だと、昼間は大抵、横になってるって。
銀太夫　わざわざ千駄ヶ谷なんて田舎に引っ越したのに、効果なしですか。
迅助　まだたったの五日ですからね。効果が出るのはこれからですよ。
銀太夫　新選組もすっかり変わってしまいましたね。池田屋や蛤御門の頃は、活気に満ち溢れていたのに、今はまるで秋の夕暮れです。
迅助　これからまた人が増えて、賑やかになりますよ。
銀太夫　そんな呑気なことがよく言えますね。この屯所に来て、もうすぐ一月。それなのに、隊士は全然増えてないじゃないですか。
迅助　でも、捷平が入りました。これからだって、きっと。
銀太夫　立川さんは気づいてないんですか？
迅助　何がですか？
銀太夫　今の我々の仕事は、慶喜公の警護だけ。警護と言っても、寛永寺の周りをただ歩き回るだけです。おまけに、我々を引き立ててくださった、松平容保様は国元の会津へ帰されてしまった。もはや、新選組に昔の勢いはない。このまま行けば、隊は解散。私たちは浪人に逆戻りです。
迅助　その時はその時ですよ。私は新選組に入るまで、両国で土方をしていたんです。その頃の知り合いに頼めば、またやらせてもらえると思います。
銀太夫　あなた、本当にそれでいいんですか？

迅助　ええ。三鷹さんは、前はどんな仕事を？
銀太夫　私は神田で和算の塾をやっていました。とても小さな塾ですが。
迅助　だったら、また塾をやればいいじゃないですか。
銀太夫　しかし、幕府軍が負けて、江戸が薩長軍のものになったら？　やつらは新選組を恨んでいます。新選組にいた人間がただで済むわけない。
迅助　でも、三鷹さんは何もしてないじゃないですか。
銀太夫　何もしてないとはなんですか。新選組の会計は私が一人でやっていた。新選組を影で支えていたのは私だったんです。それが薩長のやつらにバレたら、私の命はない。
迅助　それは考えすぎだと思いますが。

そこへ、土方・昭島がやってくる。土方は手紙を持っている。

土方　立川、帰ってたのか。なぜすぐに報告に来ない。
迅助　申し訳ありません。つい話に夢中になって。
土方　話とは。
銀太夫　沖田さんの様子を聞いていたんです。（迅助に）今日も特に変化はなかったんですよね？
土方　あいつ、飯はちゃんと食ってるんだろうな？
迅助　もちろんですよ。朝昼晩、必ずおかわりをしているそうです。
土方　だったら、いい。明日も行って、様子を見てくるんだ。三鷹、屯所にいる隊士を集めろ。重大な報せがある。（と手紙を示す）
銀太夫　その書状は？

昭島　近藤先生がお書きになったものです。近藤先生は今朝、私を連れて、江戸城へ参内したんです。幕府の重役方に呼び出されて。

迅助　捷平が近藤先生のお供を？　まだ入ったばかりなのに。

土方　人手が足りねえんだ。文句を言うな。

昭島　（銀太夫に）控えの間でお待ちしていたら、この書状を土方先生に届けろと。で、ここまで走ってきたというわけです。

土方　三鷹、隊士を集めろと言ったのが、聞こえなかったのか？

銀太夫　それが生憎、皆さん、出払ってるんです。屯所にいても、することがないですからね。

昭島　それはおかしい。非番の日は、剣を振るとか、書物を読むとか、自分を高めるための努力をするべきでしょう。

銀太夫　理想はその通りなんですが、落ち目の新選組に新たな仕事が来るとは思えないし。あ。

土方　ほう。それはおまえの意見か。

銀太夫　違うんです、土方先生。今のは巷の噂でして。

土方　だったら、その噂は今日で消える。この書状の中身を知ったら、腰を抜かすだろう。

迅助　一体、何が書いてあるんです？

土方　三鷹、立川、喜べ。ついに、新選組に大仕事が舞い込んだんだ。幕府から、甲府城を押さえろという指令が出たんだ。

銀太夫　甲府城？　あの城は元々、幕府のものですが。

土方　手紙にはこう書いてある。薩長軍は今、慶喜公討伐を掲げて、江戸へ向かっている。軍は三つに分かれて、中山道、東海道、東山道を進んでいる。俺た

ちの敵は、東山道を進む軍。大将は、土佐の板垣退助。俺たちは、敵が来る前に、甲府城に入り、敵を迎え撃つんだ。

銀太夫　そんな大仕事を、我々新選組が？

昭島　敵を打ち払うことがきたら、莫大な報奨金が出るそうです。甲府地方が幕府に納める米は年間でおよそ百万石。その半分の五十万石が新選組のものになるんです。

銀太夫　五十万石？

土方　近藤さんも大喜びさ。自分に十万石、俺に五万石、平隊士にも均等に千石分けると書いてある。

銀太夫　ということは、私も千石いただけるんですか？　立川さん、これがどんなに凄いことか、あなたにわかりますか？

迅助　さあ、いきなり千石って言われても、ピンと来なくて。

銀太夫　私の父は南部藩の勘定方で、石高は五十石でした。千石ももらえるのは、藩の頂点のご家老様だけ。つまり、我々はこれから、ご家老様のような暮らしができるんです。

昭島　三鷹さん、すべては東山道軍を倒してからですよ。

銀太夫　そんなことはわかっています。でも、私にだって、夢を見る権利はあるでしょう？

昭島　いや、私は今すぐにでも、準備を始めるべきだと思います。敵の軍がどれほどの規模かわかりませんが、今の新選組の人数ではとても戦にならない。武器や食料も調達しないと。

土方　兎にも角にも、金がいるな。さて、誰に相談したものやら。

昭島　医学所の松本良順先生はいかがです。あの方なら、幕府にも顔が利く。

土方　いい所に目をつけた。今から手紙を書くから、届けてくれ。
迅助　私が行きます。
土方　いや、昭島に頼む。思いついたのは、昭島だからな。
昭島　（迅助に）悪く思うなよ。俺は新選組の役に立ちたいだけだ。

昭島・土方が去る。銀太夫が懐から手紙を取り出して、破る。

迅助　三鷹さん、何をしてるんですか？
銀太夫　（紙を懐に入れて）いいえ、別に。それより、ここでのんびりしていて、いいんですか？　また昭島さんに先を越されますよ。

迅助が去る。

銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　慶応四年三月一日、新選組は甲府城を押さえるため、甲陽鎮撫隊と称して、鍛冶橋の屯所を出立した。松本良順先生の指示により、浅草弾左衛門の配下百名余りが参加し、総勢はおよそ百五十名。その日は江戸から二〇キロの府中に宿泊。近藤先生を知る人々によって、盛大な祝宴が催された。明けて二日の昼、土方先生の故郷、日野に到着。名主の佐藤彦五郎殿の屋敷で、しばし休息することとなった。

そこへ、みいがやってくる。銀太夫の背後に歩み寄る。

銀太夫　（みいに気づいて）うわー！　何ですか、あなたは！

みい　（頭を下げる）

銀太夫　ん？　よく見たら、うら若き町娘。私に何か用ですか？

みい　（うなずく）

銀太夫　わかった。私が新選組勘定方・三鷹銀太夫だと知って、一筆揮毫してくれと言うんですね？　いいですよ。喜んでお書きしましょう。さあ、筆と紙を。

みい　（首を横に振る）

銀太夫　違うんですか？　じゃ、一体何の用です。
みい　あの、沖田さんは？
銀太夫　おやおや、あなたも沖田さんの信奉者ですか。あんな子供みたいな人のどこがいいのかな。残念ですけど、沖田さんはここには来てませんよ。江戸でお留守番です。
みい　それは違います。
銀太夫　違いませんよ。沖田さんは体を壊して、療養中なんです。
みい　もういいです。（背を向けて、走り出す）
銀太夫　ちょっと、あなた。勝手に中へ入らないでください。

みいが去る。後を追って、銀太夫が去る。
慶応四年三月二日昼。日野にある、佐藤彦五郎の屋敷。
土方・迅助・昭島がやってくる。

迅助　大丈夫ですか、土方先生。足がふらついてますよ。
土方　余計な心配はするな。おまえらは中に戻れ。
昭島　いや、酒はもう十分です。まもなく、出立の時刻ですし。
土方　ほんの休憩のつもりで立ち寄ったのに、とんだ騒ぎになっちまったな。しかし、彦五郎殿は新選組の大恩人だ。せっかくのもてなしを、無下に断るわけには行かない。
昭島　彦五郎殿というのは、土方先生のご親戚ですか？
土方　義理の兄だ。
昭島　ということは、隣にいた方が、土方先生の姉上ですか。道理で、お顔が似て

土方　いると思いました。
迅助　姉には言うなよ。俺に似てると言われると、怒るんだ。
土方　それにしても、立派なお屋敷ですね。あそこに見えるのは道場ですか？
　　ああ。彦五郎殿は名主のくせに、剣術が好きでな。それで、自分の家の庭に道場を建てたんだ。俺も子供の頃から、あの道場で修行させてもらった。そこへ教えに来たのが近藤さんというわけだ。
迅助　おいくつの時ですか？
土方　俺が十七、近藤さんが十八だった。俺も剣には多少の自信があったんだが、近藤さんには一度も勝てなかった。それなのに、あの人は少しも威張らない。世の中にはこんなに気持ちのいい男がいるのかと驚いたんだ。
昭島　あそこで剣を振っていたお二人が、幕府の軍隊を率いて帰ってこられた。彦五郎殿がお喜びになるのはよくわかります。
土方　軍隊と呼ぶには、あまりに貧弱だがな。
昭島　それはそうかもしれませんが、今度の戦に勝てば、近藤先生の発言力は一気に高まります。さらなるご出世も夢ではありません。
土方　なるほど。昭島の夢は出世か。
昭島　違います。私は私の力を思う存分発揮したい。新選組なら、それができると思ったんです。入隊させていただいて、心から感謝しています。
土方　武士の本分は、戦で役に立つかどうかだ。おまえの本当の力がどれほどのものか、これからとくと拝見させてもらう。
昭島　わかりました。ご期待に背かぬよう、全力を尽くします。

そこへ、沖田がやってくる。

沖田　土方さん、遅くなってすみません。
迅助　沖田さん。
沖田　そんなに驚かないでくださいよ。足はちゃんとついてます。

そこへ、みい・銀太夫がやってくる。

みい　沖田さん！
迅助　みいさん、あなたが沖田さんを連れてきたんですか？
銀太夫　立川さん、この娘は？
迅助　千駄ヶ谷の植木屋の娘で、沖田さんのお世話をしている、みいさんです。
沖田　（みいに）私はついてくるなと言ったはずですよ。
銀太夫　沖田さん、そうカッカしないで、少しはこの人の気持ちを考えてあげてください。この人はあなたの体が心配なんですよ。
沖田　三鷹さんは黙っててください。
銀太夫　いいえ、黙りません。あなたは病人です。病人は体を治すことに専念するべきです。すぐに駕籠を呼びますから、この人と一緒に帰ってください。
沖田　お断りします。私はこの戦に加わると決めたんです。
土方　今のおまえに何ができる。
沖田　何だって、できますよ。この十日間、たっぷり休ませてもらいましたからね。おかげで、すっかり元の体に戻りました。
迅助　それは嘘です。ときさんの話だと、昼間は大抵、横になってるって。
沖田　昼間はね。でも、朝は庭で素振りをしました。それも毎日。そうですよね、

みい　みいさん？
迅助　（うなずく）
みい　なぜ止めなかったんです。
沖田　止めました。何度も何度も。でも、沖田さんは、これが自分の仕事だって。
土方　（土方に）これでわかったでしょう？　私は前のように戦えるんです。
　　ガキみてえに駄々をこねるんじゃねえ。おまえは自分の体のことだけを考えていればいいんだ。
沖田　桜の花は美しい。しかし、最後は必ず散ります。せっかくきれいに咲いたのに、なぜあっさり散るのか。それは散るのも、桜の仕事だからです。私も武士として生まれたからには、武士らしく死にたい。布団の上で萎れるんじゃなくて、戦場で堂々と散りたいんです。
土方　今のおまえが戦の役に立つと思ってるのか？
沖田　思っています。私は京にいた頃と同じように、戦えます。
土方　だったら、証拠を見せてみろ。（と抜刀する）
迅助　土方先生。
土方　どうした、総司。元の体に戻ったんじゃなかったのか？

　　沖田が抜刀する。土方に刀を向ける。

みい　沖田さん、やめてください。
土方　みいと言ったな？　子供が余計な口出しをするな。

　　土方も沖田に刀を向ける。沖田が斬りかかる。土方がかわす。再び、沖田が斬りかかる。

土方がかわして、沖田の腕をつかむ。

土方　総司、もう十分だろう。

沖田が土方の手を振り払い、ひざまずく。

土方　おまえの気持ちはしっかり受け取った。必ず生きて帰るから、江戸で待て。

沖田　土方さん……。

土方　三鷹、駕籠を呼んでやれ。

銀太夫　わかりました。

銀太夫が去る。土方が刀を納め、去る。

迅助　沖田さん、お願いですから、土方先生の言う通りにしてください。

沖田　いやだと言ったら、今度こそ斬られますかね。

迅助　沖田さん！

沖田　冗談ですよ。私は江戸で待てと言われたんだ。潔く退散します。（と刀を納める）

みい　（大声で泣き出す）

迅助　どうして泣くんですか。沖田さんは死ななかったんですよ。

昭島　逆だ、迅助。みいさんは、沖田さんが助かって、安心したから泣いたんだ。

沖田　あなたは。

昭島　お初にお目にかかります。一月の終わりに入隊した、昭島捷平です。

迅助　そうか。沖田さんにはまだ会ってなかったんだな。
昭島　（沖田に）僭越ながら、私も沖田さんのお気持ちはしっかり受け取りました。沖田さんの分まで、精一杯戦ってきます。

銀太夫が戻ってくる。

銀太夫　駕籠の用意ができました。乗ってくれますよね、沖田さん？
沖田　ええ。
銀太夫　よかった。みいさんの分も用意しましたよ。沖田さんを必ず無事に届けてくださいね。
みい　はい。

沖田・銀太夫・みいが去る。

昭島　沖田さんが新選組随一の使い手というのは、本当だったんだな。
迅助　今の立ち合いでわかったのか？
昭島　最初の突き、あれほど鋭い突きは今まで見たことがない。まあ、その後の攻撃は、疲れたせいか、動きが鈍くなったが。
迅助　俺はダメだな。あんな凄い人に稽古をつけてもらったのに、ちっとも強くなってない。
昭島　そんなことはない。おまえは見違えるほど強くなった。
迅助　でも、おまえに負けたじゃないか。俺の剣はまだまだ未熟なんだ。
昭島　そう思うなら、もっと稽古するしかないな。そろそろ出立の時刻だ。中へ戻

って、支度をしよう。
先に行っててくれ。すぐに追いかけるから。

迅助　昭島が去る。迅助が刀を抜いて、構える。振る。そこへ、沖田がやってくる。

沖田　いいですか、立川さん。敵と向かい合った時、一番大切なのは目です。敵の動きをよく見ることです。敵が右の袈裟斬りで来たら、左へ払う。それで、右の胴が空いたら、左の突き。こういった判断が瞬時にできなければ、敵は斬れません。

迅助　わかってはいるんですが、体がうまく動かないんです。

沖田　じゃ、わかりやすくするために、番号をつけましょう。右の袈裟が一、胴が二、脛が三、突きが四。

迅助　左の袈裟が五、胴が六、脛が七、突きが八。

沖田　そして、面が九です。私が番号を言いますから、その通りにやってみてください。

沖田が番号を言う。迅助が沖田の言葉に合わせて、刀を振る。何度も何度も。そこへ、銀太夫がやってくる。

銀太夫　何をやってるんですか、立川さん。もう出立の時刻ですよ。

迅助　え？

迅助が周囲を見回す。沖田の姿はない。

銀太夫　ボーッとしてないで、早く支度をしてください。今日はこれ以上、土方先生を困らせないでください。

迅助　わかりました。

迅助が去る。

銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　日野を出た甲陽鎮撫隊は、八王子から数隊に分かれ、甲州街道を西へ向かった。近藤先生が率いる本隊はそのまま八王子に宿泊。永倉新八さんと原田左之助さんが率いる先発隊は、小仏峠へ。明けて三月四日、本隊が駒飼に到着すると、驚くべき知らせが待っていた。

慶応四年三月四日昼。駒飼にある、甲陽鎮撫隊の本陣。

土方がやってくる。反対側から、迅助が走ってくる。

迅助　土方先生、永倉さんからの報告です。東山道軍が既に甲府城へ入ったと。

土方　何だと？　間違いないのか。

迅助　間違いありません。永倉さん自身が馬で確かめてきたそうです。

土方　敵の数は。

迅助　正確な数はわかりません。次第に増えているとしか。

そこへ、昭島が走ってくる。

昭島　土方先生、ただ今戻りました。
土方　城が取られたって話なら、今、立川から聞いたぞ。
昭島　東山道軍の陣容がわかりました。総大将は、やはり土佐の板垣退助。総数はおよそ三千。
迅助　三千？
昭島　（土方に）土佐藩だけではなく、岡山藩、高島藩も加わっているようです。
土方　俺は近藤さんに話してくる。おまえらは他の隊に知らせてこい。
昭島　承知しました！

迅助・土方・昭島が去る。
銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　東山道軍が甲府城に入ったという知らせは、鎮撫隊の隊士たちに強い衝撃を与えた。あっと言う間に三十名近くが脱走し、残りは百三十名足らず。近藤先生は、さらなる脱走者を食い止めるべく、会津から援軍が来ると通達。しかし、それは事実ではなく、ただの願望に過ぎなかった。そして、三月五日。

慶応四年三月五日昼。駒飼にある、甲陽鎮撫隊の本陣。
迅助・土方・昭島がやってくる。

土方　三鷹、駕籠を用意しろ。俺は神奈川へ援軍を頼みに行く。
銀太夫　神奈川には確か、菜葉隊がいましたね。
昭島　菜葉隊の総数は千六百。それだけ来れば、十分対抗できますよ。

土方　いや、千六百じゃまだ足りねえ。立川、昭島、おまえらは江戸へ行け。手分けして、目ぼしい藩邸を回るんだ。期限は三日。三日後、必ずここへ戻ってこい。

迅助　わかりました。

土方　三鷹、二人にも駕籠を呼べ。

昭島　その必要はありません。私たちなら、走った方が早い。

迅助・昭島が走り出す。土方が去る。

銀太夫　立川さんと昭島さんは、甲州街道を東へ向かって走り出した。駒飼から大月まで、走行距離はおよそ二四四〇〇メートル。所要時間は、ちょうど一時間。

大月の路上。

迅助・昭島が立ち止まる。

迅助　俺は、ここから南に下って、谷村へ行く。そこの陣屋で、援軍が頼めないかどうか聞いてくる。

昭島　いや、俺が行く。確か、谷村からも江戸へ抜ける道があっただろう。

迅助　でも、かなり遠回りになるぞ。

昭島　だから、俺が行くんだ。

迅助　谷村に行くことを思いついたのは俺だぞ。

昭島　その通りだ。しかし、足は俺の方が速い。遠回りしても、必ずおまえに追いついてみせる。さあ、行け。

迅助・昭島が走り出す。

銀太夫　立川さんは、甲州街道をさらに東へ向かって走り出した。一方、昭島さんは脇道に入って、谷村を目指した。大月から谷村まで、走行距離はおよそ八〇〇〇メートル。昭島さんの足なら、三十分もかからずに到着するはずだった。

迅助・銀太夫が去る。
大月から谷村へ向かう山中。
清水旋六と須崎弓兵衛がやってくる。

清水　しばし待たれい。貴公に少々尋ねたいことがある。
昭島　悪いが急いでるんだ。道を開けてくれないか。
須崎　そいつはできない相談だな。幕軍を逃がすわけには行かない。
昭島　そう言うあんたたちは、板垣の部下か。こんな山の中で何をしている。
清水　我々は幕軍の数が知りたい。大将がどこの誰かということも。
昭島　俺が答えると思うか？
須崎　いやでも答えてもらうさ。

須崎が刀を抜いて、昭島に斬りかかる。昭島がかわして、刀を抜く。

清水　待て、須崎。
須崎　こいつは素直に答える玉じゃない。さっさと斬り捨てて、陣へ戻りましょう。
清水　そう言わずに、待て。昭島さん、あんた、昭島さんじゃないか？

昭島　あんた、俺を知ってるのか？
清水　俺は清水。斎藤道場で一緒だった、土佐の清水旋六だ。
昭島　ああ、道場一の大飯食らいだった、清水さんか。
清水　久しぶりだな、昭島さん。あんたが幕軍にいるとは思わなかった。
昭島　俺の家は代々、徳川家の家臣だ。たとえ逆賊との汚名を着せられようとも、徳川家のために戦う。
須崎　清水さんに免じて、命は助けてやる。俺たちと一緒に陣へ来い。
昭島　偉そうに命令するな。俺は急いでると言っただろう。
須崎　なんだ、その口のきき方は。

須崎が昭島に斬りかかる。昭島が受けて、須崎の刀を払う。再び、須崎が昭島に斬りかかる。清水が刀を抜いて、須崎の刀を受ける。須崎が清水の刀を払って、昭島に斬りかかる。昭島がかわす。そこへ、室戸策太郎がやってくる。

室戸　何をしている。二人とも刀を引け。
須崎　しかし、こいつは幕軍です。
室戸　引けと言ったのが聞こえなかったのか。

清水・須崎が刀を納める。

室戸　（昭島に）この者たちのご無礼、平にご容赦ください。日頃から、無益な殺生はするなと、言い聞かせているのですが。
昭島　それはまた異なことを。戦に殺生はつきものでしょう。

室戸　私はそうは思いません。今は日本人同士が殺し合いをしている場合ではない。この戦も、できれば一滴の血も流さずに済ませたい。

昭島　おもしろいことを言う。失礼だが、貴公は？

室戸　申し遅れました。私は土佐藩士、室戸策太郎と申します。して、貴公は？

昭島　新選組隊士、昭島捷平です。

須崎　新選組？　貴様、今、新選組と言ったのか？

昭島　室戸さん、あんたは今、血を流したくないと言った。ならば、ここは黙って、私を通してもらいたい。では。（と歩き出す）

須崎　待て。（と刀を抜いて）他の隊ならともかく、新選組だけは許さん。八つ裂きにしてやる。

昭島　八つ裂きとは恐れ入った。結局、土佐の人間は、血がお好きなようだ。

清水　それは違う。室戸さん、昭島さんは私の知り合いです。江戸の斎藤道場で、共に剣を振った仲間です。

室戸　技量は。

清水　免許皆伝で、一時は塾頭を務めていました。人柄もまじめで、斬るには惜しい男です。

須崎　清水さん、あなたは新選組の肩を持つんですか。

昭島　その男の言う通りだ。清水さん、俺たちは今、敵と味方だ。腹を決めて、斬り合うとしようじゃないか。

室戸　三対一で勝てますか。

昭島　勝てますよ。俺は五対一でも勝ったことがある。

室戸　さすがは新選組ですね。

昭島　いや、俺はまだ新米です。だから、ぜひとも手柄がほしい。こんな所で足止

めを食うわけには行かないんだ。

昭島が室戸に斬りかかる。室戸がかわして、刀を抜く。須崎が昭島に斬りかかる。昭島がかわして、須崎に斬りかかる。清水が昭島の刀を受けて、払う。室戸が昭島に斬りかかる。昭島がかわして、走り去る。室戸・清水・須崎が後を追って、去る。

慶応四年三月八日夕。八王子にある、多賀神社。

迅助が走ってくる。反対側から、銀太夫が走ってくる。

銀太夫　立川さん、止まってください！

迅助　三鷹さん。どうして八王子にいるんですか？　他の人たちは。

銀太夫　向こうの神社で休息中です。立川さん、一人ですか？

迅助　申し訳ありません。思いつく限りの藩邸を回ったんですが、どこも人手不足だと言われてしまって。

銀太夫　やはりそうですか。土方先生も、つい先程、我々と合流されました。神奈川でさんざん足止めを食らった挙げ句、軍は動かせないと断られたと。

迅助　しかし、なぜ八王子まで戻ってきたんです？　まさか、もう戦が終わったんですか？

銀太夫　あなたたちが出立してすぐ、近藤先生は柏尾山に陣を移しました。翌日から戦闘が始まり、その後は伏見の二の舞です。次から次へと攻撃され、退却することしかできませんでした。

迅助　近藤先生はご無事なんですか？

銀太夫　ええ。近藤先生はこのまま江戸へ帰ると仰っています。人数も、半分近くに減ってしまいましたし。

迅助　そんなにひどい戦だったんですか？

銀太夫　違いますよ。みんな逃げたんです。戦に負けたことだけが理由じゃない。近藤先生の、援軍が来るという言葉が、嘘だとわかったからです。

迅助　すみません、役に立てなくて。

銀太夫　土方先生でさえダメだったんです。あなたが詫びることはない。

迅助　そうだ。昭島は戻ってきましたか？

銀太夫　いいえ、まだ。ひょっとすると、あの人も逃げたのかもしれませんね。

迅助　あいつに限って、そんなことはありません。俺、土方先生に報告してきます。

迅助が去る。

銀太夫　ああ、夢がガラガラと。

銀太夫が去る。

慶応四年三月十一日昼。柴田辰次郎宅の離れ。
みいがやってくる。刀を持っている。後を追って、沖田がやってくる。

沖田　みいさん、どこへ行くんですか？
みい　（刀を背中に隠して）母屋。
沖田　何をしに？
みい　おばさん、洗濯、手伝い。
沖田　それは感心ですね。でも、私の刀は置いていってください。
みい　カツラ？
沖田　刀ですよ、刀。今、背中に隠して、持ってるでしょう？　刀は武士の魂です。それを勝手に持ち出すなんて、とんでもない人ですね。
みい　（刀を前に出して）これは私がお預かりします。
沖田　冗談を言わないでください。あなたには必要ないものでしょう？（刀に手を伸ばす）。
みい　（かわして）私がお預かりします。
沖田　ダメです。今すぐ、返しなさい。
みい　返したら、またやるでしょう、お稽古。
沖田　当然でしょう？　病が癒えたら、私はすぐに隊務に復帰しなければならない。

みい　その時、剣が振れなければ、敵に斬られて死ぬんですよ。
沖田　だったら、薪でも、すりこぎでも、振ればいい。
みい　わかりました。明日からはすりこぎにします。だから、刀は返してください。いやです。

沖田が追う。みいが逃げる。そこへ、ときがやってくる。

とき　おやおや、いい年をして、鬼ごっこですか？
沖田　違いますよ。みいさんが私の刀を返してくれないんです。
とき　みい、病人に意地悪をするんじゃないよ。沖田さんも、あんまり走ると、また熱が出ますよ。
沖田　いや、参りました。みいさんは女子のくせに、すばしっこいですね。
とき　まるで猫みたいでしょう？　赤ん坊の頃は、鳴き声が仔猫にそっくりでしてね。それで、みいって名前になったんです。
沖田　そうだったんですか。おい、猫。その刀は私の魂なんだ。これ以上、意地を張ると、毛を毟るぞ。
みい　沖田さんは間違ってます。
沖田　何がですか。
みい　これは魂なんかじゃない。ただの鉄の棒です。こんなものに頼っているから、いつまで経っても、よくならないんです。

そこへ、迅助・ミツがやってくる。ミツは風呂敷包みを持っている。

迅助　沖田さん、ご無沙汰してました。
とき　そうそう、私はお客を案内してきたんだった。さあさあ、こちらへどうぞ。
ミツ　（沖田に）今日は、向島で桜餅を買ってきました。あなた、甘いものには目がないでしょう？
みい　ひょっとして、長命寺の桜餅ですか？　私の大好物です。

沖田がみいの手から刀を奪い取る。

みい　あっ！　返してください！
沖田　これは私のものですよ。返してはないでしょう。
みい　でも。
沖田　あなたには刀より、桜餅がお似合いです。
ミツ　みいさんもときさんもどうぞ。たくさんありますから。
とき　そうですか？　じゃ、遠慮なく。みい、お茶を淹れといで。
迅助　私も手伝いましょうか？
沖田　立川さんはここにいてください。聞きたいことがあるんです。

みいが去る。四人が座る。

迅助　沖田さんが聞きたいのは、甲州の戦のことですか？
沖田　その話は、ときさんから聞きました。たったの八日で逃げてきたと、江戸中の噂になってるそうです。
とき　新選組も大したことねえなって。いいえ、今のは私じゃなくて、世間の人た

沖田　ちが言ってることで。
（迅助に）土方さんはどうしてますか？　あの人のことだから、もう一度行くって息巻いてるんじゃないですか？
迅助　いや、今はそんな余裕はなくて。
ミツ　どうしたんですか、立川さん？　今日は何だか元気がないですね。
沖田　（迅助に）もしかして、土方さんに何かあったんですか？
迅助　そうじゃないんです。実は、永倉さんと原田さんが、新選組を離れることになりまして。
沖田　そんなバカな！　理由は何です？
迅助　一言で言えば、意見の食い違いです。お二人は、一刻も早く会津へ行くべきだと仰いました。容保公をお守りしながら、薩長軍の侵攻に備えるべきだと。しかし、近藤先生は、今はまだ動く時ではない、徳川家の指示を待てと。
ミツ　土方先生のご意見は？
迅助　もちろん、近藤先生と同じでした。朝まで議論したんですが、結局、どちらも折れずに。
沖田　だからって、辞めることはない。一緒にやっていくことはできるはずだ。
とき　永倉さんと原田さんていうのは、どういう方なんですか？
迅助　新選組の幹部で、共に試衛館のご出身です。だから、沖田さんとの付き合いは、五年以上になるはずです。
沖田　もっとですよ。十年か、十一年か。

そこへ、みいが戻ってくる。箱を持っている。

みい　あの、お湯が沸く前に、桜餅だけ召し上がりませんか？
とき　静かにしな。今、大事な話をしてるんだ。
迅助　（沖田に）淋しくなりますね、新選組も。
沖田　でも、まだ近藤先生がいます。土方さんもいます。それに、私だって。
ミツ　総司、私の頼みを聞いてくれますか。
沖田　頼みって？
ミツ　新選組の命運はもはや尽きようとしています。永倉さんと原田さんが辞めた今、解散は時間の問題です。だから、あなたもこの際――
沖田　新選組を辞めろと言うんですか？　お断りします。
ミツ　あなたの気持ちはわかります。しかし、今のあなたに何ができます。体の具合は一向によくならない。むしろ、悪くなる一方じゃないですか。
沖田　そんなことはありません。今だって、庭を走り回ってましたし。
ミツ　そうやって無理をすることが、どんなに体を傷めるか、わからないんですか？
この前だって、勝手に日野まで行ったりして。
とき　その節は申し訳ありませんでした。私は全然知らなくて。
ミツ　ときさんに責任はありません。悪いのは全部、総司です。
沖田　私の体は私のものです。どう使おうと、私の勝手ではないですか。
みい　だから、何をしてもいいって言うんですか？　人に迷惑をかけても、構わないんですか？
とき　沖田さんが、いつあんたに迷惑をかけたんだよ。
みい　いつもです。この一月、迷惑のかけられ通しです。
とき　沖田さん、みいに何をしたんですか？　まさか。
沖田　何を考えてるんですか。私にはさっぱり見当がつきません。

みい　毎晩、同じ夢を見るんです。沖田さんが刀を持って、戦へ行く夢です。私がどんなに叫んでも、沖田さんは振り向きません。で、いつも目が覚める。おかげで、全然寝た気がしないんです。

沖田　あなたの夢にまで、責任は持てませんよ。

ミツ　わからないの、総司。それだけ、あなたを心配してるってことじゃない。

沖田　別に私が頼んだわけじゃない。

ミツ　一刻も早く、新選組に戻りたい。その焦りがあなたの体を悪くしてるんです。本気で病を治すためには、いっそのこと、辞めてしまった方がいいんです。

沖田　いやです。私は辞めません。

ミツ　総司。

沖田　（平服して）お願いです、姉上。私を新選組にいさせてください。辞めろなんて、言わないでください。

ミツ　それなら、約束してください。病が完全に癒えるまで、刀は振らないと。

沖田　姉上。

ミツ　約束できないんですか？

沖田　いいえ。約束します。刀はけっして振りません。

ミツ　今日はこれで帰ります。桜餅を食べたら、すぐにお布団に戻りなさい。

とき　え？　お茶はまだですけど。

みい　あっ！　お湯、火、かけっぱなし！

みい・ミツ・ときが去る。

迅助　さすがの沖田さんも、姉上には頭が上がらないんですね。

沖田　姉上も狡いですよ。今の私から新選組を取ったら、何も残らない。それを知ってて言うんだから。立川さん、あなたは辞めたりしないですよね？

迅助　私も沖田さんと同じです。今の私から新選組を取ったら、何も残らない。

沖田　それを聞いて、安心しました。近藤先生と土方さんを助けてあげてくださいね。

迅助　私が？　全然自信がないけど、頑張ります。

沖田が去る。

慶応四年三月十一日夕。昭島宅。
佐織がやってくる。

佐織　迅助さん、あの人は今日も屯所に姿を現さなかったんですね？
迅助　ということは、こっちにも？
佐織　朝から買い物にも出ないで、待ってたんだけど。
迅助　あいつ、何をやってるのかな。大月で別れてから、もう六日も経つのに。
佐織　敵に見つかって、斬られたんでしょうか？
迅助　俺はそうは思いません。捷平ほどの男が、そう簡単に斬られるわけがない。
佐織　慰めはやめてください。
迅助　慰めじゃない。俺は本気でそう思ってるんです。あいつは強い。前に向かって、一心不乱に突き進む。あいつを止めることは誰にもできません。佐織さんもそう思いませんか？
佐織　思います。だから、心配なんです。いつもいつも、一心不乱に突き進むから。

そこへ、昭島がやってくる。

昭島　迅助、来ていたのか。

佐織　捷平さん！
迅助　（昭島に）おまえ、今までどこにいたんだ。なぜすぐに戻ってこなかった。
昭島　ご覧の通りさ。

昭島が袖をめくる。左肩に晒が巻かれている。

佐織　怪我をしてるんですね？　敵に斬られたんですか？
迅助　（昭島に）一体何があったんだ。
昭島　おまえと分かれてすぐ、東山道軍のやつらと鉢合わせしたんだ。向こうは三人、俺は一人。斬り合っても勝てるだろうと思ったんだが、中の一人がやけに腕の立つやつで、そいつに肩をやられた。
佐織　それで、その手当はどこで？
昭島　秋山という村の農家だ。おかげで血は止まったが、今度は熱が出た。で、そこの牛小屋を借りて、今日まで寝ていたというわけだ。
迅助　なぜすぐに連絡を寄越さなかった。佐織さんはおまえのことをずっと心配してたんだぞ。さっきなんか、もうこの世にいないんじゃないかって。
昭島　（佐織に）そいつは済まなかったな。
佐織　いいんです。こうして無事に帰ってきてくれたんだから。
迅助　じゃ、俺は屯所へ戻る。（昭島に）土方先生には俺から報告しておくから、今日はゆっくり家で休め。
昭島　待て、迅助。おまえに一つ聞きたいことがある。新選組が京にいた頃の話だ。
迅助　京に？
昭島　正直に答えてくれ。土佐の坂本龍馬を殺したのは、新選組なのか？

迅助　なぜそんなことを聞くんだ？

昭島　俺が斬り合いをしたやつらは、三人とも土佐藩士だった。そいつらが口を揃えて言ってたんだ。坂本は新選組に殺されたと。

迅助　それはそいつらの誤解だ。下手人は新選組じゃない。

昭島　なぜ断言できる。当時の新選組には、二百名以上の隊士がいたんだろう。

迅助　坂本さんは勤皇派の大物だった。もし隊士の誰かが坂本さんを斬ったら、大騒ぎになっていたはずだ。それに。

昭島　それに、何だ？

迅助　坂本さんはとてつもなく強いんだ。あの人を斬れる隊士なんて、沖田さんぐらいしか思いつかない。

昭島　だったら、下手人は沖田さんじゃないのか？

迅助　それはないよ。坂本さんが斬られた時、沖田さんは既に病で臥せってた。

昭島　だったら、土方さんじゃ。

佐織　捷平さん、どうしてそんなことにこだわるの？　土佐藩の人たちに、何か言われたんですか？

昭島　そうじゃない。ただ、やつらは新選組を憎んでたんだ。坂本の仇だと。

迅助　気にしない方がいい。ただの濡れ衣なんだから。

佐織　（昭島に）お腹が空いてるんじゃないですか？　今、夕餉の支度をするから、ちょっと待ってて。

迅助　安心したら、喉が乾いたな。水を一杯もらえますか。

迅助・佐織が去る。そこへ、清水と須崎衛がやってくる。

清水　お目覚めか、昭島さん。
昭島　ここは？
清水　官軍の陣だ。と言っても、元はただの農家だが。
昭島　俺は捕まったんだな？
須崎　あんたは崖から落ちて、気を失った。それで、ここまで運んできたんだ。
昭島　驚いたな。斬り合いをした相手を、わざわざ助けるとは。
須崎　礼なら、室戸さんに言え。あんたを助けると決めたのは、室戸さんなんだ。
清水　須崎、室戸さんを呼んでこい。

須崎が去る。

昭島　俺はどれぐらい眠ってたんだ。
清水　丸三日だ。戦はとうに終わったぞ。我ら官軍の圧勝だった。
昭島　何が官軍だ。あんたたちがしていることは、太閤秀吉と同じだ。この国を自分たちのものにしたいだけだ。
清水　昭島さん、あんたは誤解している。薩摩や長州はともかく、土佐の人間は幕府に対して、何の恨みもない。だから、今度の戦も、下手に長引かずに済んで、よかったと思っている。
昭島　嘘だ。

そこへ、室戸・須崎がやってくる。

室戸　嘘ではありません。

昭島　室戸さんだったな？　俺を助けたのは、何のためだ。あんたの軍に入れと言うなら、謹んでお断りする。

室戸　昭島さん、あなたは坂本龍馬という人を知っていますか。

昭島　元・土佐藩士。勝海舟先生に弟子入りして、幕府の海軍操練所の塾頭を務めていた。ところが、その後は薩摩や長州の側に回り、船を使った商売を始めた。名前は確か――

室戸　亀山社中。後に、海援隊と改めました。

昭島　そうそう。しかし、その商売は隠れ蓑。真の狙いは、薩摩と長州に同盟を結ばせることにあった。つまり、薩長軍を作ったのは坂本だったというわけだ。

室戸　では、このことはご存じですか。我が藩が慶喜公に建白した、大政奉還の案。あの案を考え出したのが、坂本さんだということを。

昭島　いや、初耳だ。もしそれが事実なら、ますます許せない。我々幕臣は、大政奉還には反対だったんだ。

室戸　あれは苦肉の策だったのです。坂本さんは、幕府と薩長の戦をなんとしても食い止めたかった。そこで、慶喜公には一大名に戻っていただき、薩摩、長州、土佐など、力のある藩の藩主と列侯会議を作っていただく。そして、その会議でこの国を動かしていく。そう考えたのです。

昭島　しかし、結果はどうだ。大政奉還しても、慶喜公は朝敵にされたではないか。

室戸　それは坂本さんが志半ばで、何者かに殺されたからです。あの人さえ生きていれば、今の戦はなかったんです。

昭島　バカバカしい。俺がそんな夢みたいな話が信じると思うか？

須崎　夢ではない。俺は坂本さん本人から、確かに聞いたんだ。

昭島　本人から？

清水　俺も聞いた。昭島さん、俺たち三人は海援隊の隊士なんだ。
昭島　海援隊の仕事は船の商売だ。こんな所にいるわけがない。
室戸　訳あって、隊を抜け、板垣殿の軍に入りました。
昭島　訳とは。
室戸　坂本さんを殺した下手人を探し出すためです。
昭島　次から次へと、意味のわからないことを。坂本を殺した下手人を探すだと？
室戸　そんなことをして、何になる？
昭島　第一に復讐。第二に、坂本龍馬の名を再び高からしめ、その思想を日本国中に喧伝すること。
室戸　今さら手遅れだ。薩長のやつらは、あくまでも幕府を倒す気でいる。列侯会議など作れるわけがない。
昭島　坂本さんの思想は、それだけではありません。これをご覧ください。（と紙を差し出す）
室戸　（受け取って読む）「船中八策」？
昭島　このまま薩長の好きにさせておけば、この国は死人で溢れます。それを食い止めるためには、その船中八策の通りにするしかない。
室戸　昭島さん、頼む。俺たちに手を貸してくれ。
清水　しかし、俺に何をしろと。
昭島　坂本さんを殺した下手人は、新選組の隊士です。あなたには、その下手人を探し出していただきたい。
室戸　バカな。俺に新選組を裏切れというのか？
昭島　あんたは何のために生きている。新選組のためか？　この国のためじゃないのか？
須崎

昭島　しかし……。

室戸　答えはいつでも結構。歩けるようになるまでは、ここでお休みください。清水、須崎、昭島殿に朝餉を。

室戸・清水・須崎が去る。昭島が紙を読む。佐織がやってくる。

佐織　捷平さん、夕餉の支度ができましたよ。あら、その紙は？

昭島　何でもない。（と紙を懐にしまって）佐織、おまえは何のために生きている。佐織　さあ。そんなこと、考えたこともありません。

昭島　俺は今日まで徳川家のために生きてきた。だから、自分のことしか考えないやつが許せなかった。しかし、間違っていたのかもしれない。

佐織　いいえ、あなたは間違ってません。あなたほど、心の真っ直ぐな人はいません。

昭島　おまえは、おまえだけは俺を信じてくれるんだな。

佐織　どうかしたんですか？

昭島　何でもない。さあ、飯にしよう。

昭島・佐織が去る。

銀太夫がやってくる。日誌を開く。

銀太夫　慶応四年三月十三日。幕府の軍事総裁を務めていた勝海舟先生は、薩摩の西郷隆盛と会談。その結果、薩長軍が計画していた江戸への総攻撃は、直前で中止となった。四月二日、新選組は流山へ陣を移した。ところが、明けて三日、陣は突然、敵の大軍に取り囲まれた。

慶応四年四月三日昼。流山にある、新選組の本陣。
迅助が走ってくる。反対側から、土方がやってくる。

迅助　土方先生、敵は、我々が甲州で戦った、東山道軍でした。
土方　バカな。東山道軍がなぜ流山にやってくる。
迅助　あの後、いくつかの隊に分かれて、江戸へ向かったようです。流山に来たのは本隊で、総数はおよそ五〇〇。
土方　三鷹、ここには何人隊士が残っている。
銀太夫　ほとんどの人が、朝から鉄砲の訓練に出てしまいましたので、私たちを入れても、十人前後かと。
土方　今すぐ、訓練に出たやつらを呼び戻せ。

迅助　それは無理です。ここは敵に完全に包囲されています。

そこへ、昭島が走ってくる。

昭島　土方先生、今、表に敵の使者がやってきました。

土方　何者だ。

昭島　薩摩の有馬藤太と名乗っています。至急、我が隊の隊長に面談したいとのことです。

土方　そいつは俺たちが何者か、知っていたか。

昭島　いいえ。

土方　だったら、まだ打つ手はある。すぐに奥へ案内しろ。

土方が去る。迅助・昭島も去る。銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　近藤先生と土方先生は、有馬藤太に対し、我々は下総の鎮撫を命ぜられた幕府軍であると説明した。その際、近藤先生は若年寄・大久保大和、土方先生は寄合席・内藤隼人と名乗った。しかし、有馬は信用せず、直ちに降伏しなければ、攻撃を開始すると言った。

そこへ、迅助と昭島がやってくる。

迅助　三鷹さん、土方先生は？

銀太夫　まだ近藤先生とお話し中です。終わるまで、誰も中に入れるなと。

昭島　三鷹さん、近藤先生と土方先生が偽名を名乗られたというのは本当ですか。
銀太夫　大久保大和と内藤隼人ですか？　これは偽名ではありません。甲陽鎮撫隊を作った時、幕府からいただいたのです。
昭島　しかし、普段は使ってない。
銀太夫　そりゃそうですよ。だって、土方先生が「隼人」って顔ですか？
昭島　だったら、堂々と本名を名乗るべきです。
銀太夫　そんなことができるわけないじゃないですか。ここにいるのが新選組の近藤と土方だと知ったら、敵はすぐに攻めてくる。たったの十人で、五〇〇人に勝てますか？
昭島　三鷹さんは死ぬのが怖いんですか？
銀太夫　バカにしないでください。私だって、一応武士ですよ。
昭島　武士ならば、たとえ負けるとわかっていても、堂々と戦うべきです。
迅助　そんなことは、近藤先生と土方先生も承知してるさ。しかし、今、お二人が死んだら、幕府はどうなる？
昭島　なぜ戦う前から死ぬと決めつける。大切なのは、死を恐れずに戦うことだ。

そこへ、土方がやってくる。

土方　三鷹、馬を用意しろ。俺は今から江戸へ行く。
銀太夫　江戸のどこへ？　まさか、援軍を頼みに行くのですか？
土方　違う。戦はなしだ。かわりに、近藤さんが東山道軍に投降することになった。一人で。
銀太夫　つまり、自ら敵の捕虜になるということですか？　でも、そんなことをした

ら、お命が。

土方　近藤さんは腹を切ると言ったんだ。自分が死ねば、他の隊士は見逃してもらえるだろうと。しかし、こんな所であの人を死なせるわけには行かねえ。だから、大久保大和として投降してもらうことにした。

昭島　大久保大和として？

土方　俺はこれから勝さんに会ってくる。俺たちが幕府の鎮撫隊であること、隊長が若年寄の大久保大和であることを証明する、証文を書いてもらう。

銀太夫　その証文を敵陣へ持っていけば、近藤先生は助かるんですね？

昭島　（土方に）しかし、それは嘘ではないですか。

土方　嘘じゃねえ。大久保大和は、近藤さんのもう一つの名前だ。

昭島　新選組の隊旗には誠という字が書いてあります。あの字が嘘でないならば、堂々と戦うべきです。

迅助　捷平、やめろ。

土方　（昭島に）負けるとわかっているのに、戦うバカがどこにいる。

昭島　土方先生、あなたは本当に武士ですか？

土方　何だと？（と昭島の胸ぐらをつかむ）

銀太夫　土方先生、今は内輪揉めをしている時ではありません。

土方　（昭島を突き飛ばして）昭島、よく聞け。近藤さんは俺の夢だ。こんな所で死なせてたまるか。三鷹、馬だ。

銀太夫　はい、ただいま。

土方・銀太夫が去る。

迅助　捷平、土方先生を一人で行かせるのは危険だ。俺たちも行こう。
昭島　わかった。その前に、厠へ行かせてくれ。

迅助が去る。
流山にある、東山道軍の本陣。
清水・須崎がやってくる。

清水　昭島さん、あんたがなぜここにいる。
昭島　俺は室戸さんに会いに来たんだ。急いで、呼んでもらえないか。
須崎　そうか。あんたはあの陣の中にいたんだな？
清水　しかし、あそこにいるのは、幕府の若年寄が率いている隊のはずだ。（昭島に）あんた、新選組は辞めたのか？
昭島　説明は後だ。早く、室戸さんを呼んでくれ。
清水　あの人はここにはいない。今頃は、江戸の藩邸で、重役たちの会議に出席しているはずだ。
昭島　土佐藩の藩邸は確か、鍛冶橋だったな？　では。
須崎　待てよ、昭島さん。あんたたちの陣は完全に包囲されている。抜け出すのは不可能だ。
昭島　いや、包囲はまもなく解かれる。俺たちの隊の隊長が投降するんでね。
清水　ここから鍛冶橋は遠い。その話は、俺が室戸さんに伝えよう。
昭島　悪いが、もう戻らないと。厠へ行くと言って、抜けてきたんだ。

清水・須崎が去る。

新選組の本陣。
迅助がやってくる。

迅助　遅かったな、捷平。土方先生はとっくに出立したぞ。
昭島　すまない。昨夜から、腹の具合が悪くて。さあ、行こう。

迅助・昭島が走り出す。銀太夫がやってくる。日誌を開く。

銀太夫　立川さんと昭島さんは江戸を目指して、走り出した。松戸を過ぎたあたりで日が暮れ始め、千住に着く頃には薄暗闇に。すると突然、昭島さんが速度を上げた。立川さんも必死に追ったが、徐々に差が開いていく。そして、日本橋が差しかかった時、立川さんはついに昭島さんを見失った。

迅助・銀太夫が去る。
鍛冶屋町にある、土佐藩邸。
室戸がやってくる。

室戸　驚きましたよ。あなたが私を訪ねてくるなんて。
昭島　あんたに重大な話があってね。俺はついさっきまで、流山にいたんだ。
室戸　流山？　あそこには、幕軍の隊士が一〇〇人ほど集まって、騒いでいると聞いています。今朝方、有馬殿の隊が掃討に向かったはずですが。
昭島　その一〇〇人のうちの一人が、俺だったのさ。
室戸　なるほど。あなたがいたということは、その幕軍は――――

昭島　おっと、その前に一つ、確かめたいことがある。（懐から紙を取り出して）あんたにもらった船中八策、じっくり読ませてもらった。

室戸　ご感想は。

昭島　一言で言えば、気に入った。特に二つ目の策がいい。「上下議政局ヲ設ケ、議員ヲ置キテ万機ヲ参賛セシメ、万機宜シク公議ニ決スベキ事」。これはつまり、国の政は議員の話し合いで決めるということだな？

室戸　西洋の国々では当たり前の制度です。日本ももはや、幕府だ薩長だと争っている時代ではない。国を一つにして、世界と向き合うべきなのです。

昭島　もしそれが可能なら、俺も一肌脱ぎたい。

室戸　歓迎します。と言いたいところですが、そのためには条件がある。

昭島　坂本を殺した下手人か。残念ながら、まだわからない。そのかわりと言ってはなんだが、あんたに知らせたいことがある。

室戸　流山の幕軍のことですか？

昭島　今頃、その軍の隊長が、東山道軍に投降しているはずだ。本人は若年寄の大久保大和と名乗るだろうが――

室戸　正体は新選組局長の近藤勇。

昭島　察しがいいな。近藤の肩には、去年、鉄砲で撃たれた傷がある。それを確かめてもらえば、俺の話が嘘じゃないとわかる。

室戸　よく知らせてくれました。しかし、私はここを離れることができない。有馬さんに書状を書きますから、もう一度、流山へ戻ってもらえますか。

昭島　できるだけ急いでくれ。俺は勝海舟の屋敷へ行かなきゃならない。

室戸が去る。

赤坂にある、勝海舟宅。
迅助がやってくる。

迅助　遅いぞ、捷平。どこかで道草でも食ってたのか？
昭島　俺は、赤坂に来るのは初めてなんだ。道がわからなくなって、グルグル回っちまった。それより、土方先生は？
迅助　まだ勝先生と話している。下手をすると、朝までかかるかもしれないな。
昭島　後は俺が引き受ける。証文は流山の東山道軍へ届ければいいんだな？
迅助　俺が行くよ。おまえは一度、家へ帰ったらどうだ。佐織さんと半月近くも会ってないだろう。
昭島　余計な気づかいをするな。おまえこそ、屯所でゆっくり休んでろ。
迅助　そういうわけには行かない。俺の仕事は走ることなんだから。
昭島　それは俺も同じだ。だったら、二人で流山へ戻ろう。
迅助　わかった。今度は迷子になるなよ。

銀太夫がやってくる。日誌を開く。迅助・昭島が走り出す。

銀太夫　翌朝未明、証文を手にした二人は、昨日来た道を逆に向かって走り始めた。赤坂から流山まで、走行距離はおよそ二七四〇〇メートル。所要時間は、昭島さんが一時間一四分、立川さんが一七分。

慶応四年四月四日朝。東山道軍の本陣。

迅助と昭島が立ち止まる。

迅助　クソー、あとちょっとだったのに。

昭島　休んでいる暇はないぞ。今度は板橋だ。

迅助　板橋？

昭島　近藤先生はもうここにはいない。昨夜のうちに、板橋の総督府へ護送されたんだ。

迅助と捷平が走り出す。銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　二人は岩槻街道を南西へ向かって走り始めた。流山から板橋まで、走行距離

はおよそ一九〇〇〇メートル。所要時間は、昭島さんが五三分、立川さんが五五分。

板橋にある、官軍の総督府。
迅助と昭島が立ち止まる。

迅助　クソー、また負けた。
昭島　かわいそうだが、すぐに出発だ。
迅助　え？　また？
昭島　近藤先生はまだ到着してない。どうやら、途中で追い越しちまったらしい。
迅助　別の道を行ったのかもしれないぞ。中山道とか。
昭島　それはありうるな。おまえはもう一度、岩槻街道を引き返してくれ。俺は中山道を行ってみる。
迅助　二手に分かれるのか？　証文は一通しかないのに。
昭島　それはおまえが持っていけ。俺が近藤先生を見つけたら、すぐにおまえを呼びに行く。
迅助　そうなったら、おまえはとんでもない距離を走ることになるぞ。
昭島　構わない。俺はまだまだいくらでも走れる。
迅助　俺だって、走れるさ。

迅助と昭島が去る。銀太夫が日誌を開く。

銀太夫　立川さんは岩槻街道をくまなく探したが、近藤先生を護送する一行はどこに

もいなかった。やむなく板橋へ戻ると、総督府は東山道軍の隊士で溢れていた。たった今、近藤先生が到着したのだ。立川さんは総督府に入り、薩摩の有馬藤太を呼び出した。

丸の内にある、新選組仮屯所。
迅助・土方がやってくる。

土方　（迅助に）それで、証文は確かに有馬に渡したんだな？
迅助　はい。まさか、すぐに帰らせてもらえるとは思いませんでした。
土方　大方、近藤さんが頼んだんだろう。三鷹と同じように。
迅助　え？
銀太夫　私は近藤先生のお供をして、敵軍に投降したんです。しかし、総督府まで行ったところで、近藤先生が有馬に頼んでくださったんです。こいつはただの勘定方だから帰してやってくれ、責任はすべて局長の自分にあると。
迅助　ちょっと待ってください。なぜ近藤先生がご自分のことを局長と？
土方　板橋で何も聞かなかったのか？　近藤さんは投獄された。若年寄の大久保大和ではなく、近藤勇だということが露見したんだ。
迅助　そんな。どうして。

そこへ、昭島がやってくる。

昭島　迅助、無事だったのか。
土方　おまえはずいぶん遅かったな。どこで何をしていた。

昭島　立川から聞いてませんか。私は板橋から中山道を走ったんです。浦和の手前で、近藤先生を護送する一行を見つけて、すぐに迅助を探しに戻ったんですが、今の今まで見つからなくて。

土方　今、浦和の手前と言ったな？　ということは、浦和には行かなかったのか。

昭島　ええ、そうです。それがどうかしましたか。

土方が刀を抜いて、昭島に向ける。

迅助　土方先生！　何をするんです！

土方　こいつは敵と通じている。近藤さんの正体を知らせたのはこいつだ。

迅助　捷平が？　そんなことはありえません。

土方　たった今、昭島が自分で認めたんだ。俺たちを裏切ったと。

昭島　私がいつそんなことを。

銀太夫　あなたは、浦和には行かなかったと言いましたよね？　でも、私はあなたの姿を浦和で見たんですよ。あなたは我々が休息していた宿屋に入ってきた。そして、有馬に何かを渡していた。

昭島　それはあんたの見間違いだ。

銀太夫　いいえ、間違いなく、あなたでした。東山道軍のやつらは、近藤先生を丁重に扱っていました。ところが、あなたが浦和の宿屋に来た途端、ガラっと態度を変えたんです。

土方　（昭島に）有馬は浦和で近藤さんの正体に気づいた。それは、おまえが渡したものを見たからだ。

迅助　待ってください。私にはどうしても信じられません。捷平が裏切るなんて。

土方　第一、捷平には裏切る理由がありません。忘れたのか。昭島は近藤さんが大久保大和と名乗ることに反対だった。だから、自分の手で、正体を暴こうとしたんだ。そうだろう、昭島。

昭島　たったそれだけのことで、私が裏切ると思いますか。

土方　裏切るさ。おまえは自分が一番正しいと思ってるからな。

土方が昭島に斬りかかる。昭島がかわして、刀を抜く。

迅助　やめてください、土方先生！　捷平も刀を納めろ！

昭島　三鷹さん。あなたは私が有馬に何かを渡したって言いましたよね？　その何かとは何です。

銀太夫　大方、密書の類でしょう。薩長のやつらに、届けろと命ぜられたんです。

昭島　つまり、その密書は誰かから預かったということですか？　しかし、私はこの数日間、ずっと立川と行動してきた。密書を預かる暇などなかった。そうだろう、迅助。

迅助　（土方に）捷平の言う通りです。こいつは私のそばにいました。

土方　目を覚ませ、立川。おまえはこいつに騙されてるんだ。

土方が昭島に斬りかかる。昭島がかわす。迅助が刀を抜いて、土方の前に立つ。銀太夫が刀を抜く。

土方　立川、おまえは俺より、昭島を信じるのか。

迅助　こいつは俺が子供の頃からの友です。俺を騙すわけありません。

昭島　迅助……。

土方　（迅助に）そうか。だったら、おまえも昭島と同罪だ。

土方が迅助に斬りかかる。迅助がかわす。昭島が土方に斬りかかる。土方がかわして、昭島に斬りかかる。迅助が受ける。土方が迅助の刀を払って、迅助の右足を斬る。迅助がひざまずく。昭島が迅助に駆け寄る。

昭島　走れ、迅助。

迅助　しかし。

昭島　いいから、走れ！

昭島が土方に斬りかかる。土方がかわす。迅助が走り去る。後を追って、昭島も走り去る。

銀太夫　立川さん！

土方　追うな、三鷹。

銀太夫　なぜです。立川さんはともかく、昭島さんは新選組を裏切った。このまま見逃すわけには行きません。

土方　誰が見逃すと言った。昭島は必ず斬る。しかし、今しなければならないのは、近藤さんを救い出すことだ。

銀太夫　しかし、正体が知られてしまっては。

土方　打つ手はまだある。俺は絶対に諦めねえ。

土方・銀太夫が去る。
昭島宅。
昭島が迅助の肩を支えて、やってくる。後から、佐織がやってくる。

佐織　どうしたんですか、迅助さん？　怪我をしてるんですか？
昭島　土方に足を斬られたんだ。医者の話だと、治るまで一月ほどかかるらしい。その間、ここに泊めてやってくれ。
迅助　（佐織に）すみません。俺には帰る家がないんで。
佐織　遠慮はいりません。好きなだけいてください。でも、どうして迅助さんが土方先生に？　隊士同士で斬り合いをするなんて、信じられません。
昭島　土方が俺を斬ろうとしたんだ。俺が裏切ったと決めつけて。
佐織　（迅助に）それじゃ、この人を庇おうとして？
迅助　俺なんかが土方先生にかなうわけないんですけどね。自業自得ってやつです。
昭島　いや、おまえが助太刀してくれなかったら、俺は間違いなく斬られていた。本当に済まなかったと思ってる。
迅助　水臭いこと言うなよ。おまえが俺だったら、同じことをしていたさ。
昭島　（佐織に）迅助のこと、頼んだぞ。じゃ、俺はちょっと出てくる。
佐織　どこへ。
昭島　次の勤め口を探すんだ。働かないと、食っていけないからな。

昭島が去る。

迅助　次の勤め口か。捷平も俺も、もう新選組の隊士じゃなくなったんだな。

佐織　ごめんなさいね。あの人を助けようとしたばっかりに。
迅助　それはいいんです。間違っていたのは土方先生の方なんだから。
佐織　でも、新選組に入って、まだ一月半ですよ。捷平さんて人はいつもこうなんです。どこへ行っても、必ず上司や同僚といざこざを起こす。
迅助　あいつはまじめだからな。他のやつが少しでも手を抜くと、怒るんです。
佐織　でも、あの人自身は絶対に手を抜かない。あの人ほど強い人は見たことがありません。
迅助　だから、好きになったんですか？
佐織　ええ。でも、夫婦になってみて、気づいたんです。あの人は本当は強くない。強くなければならないと思ってるだけだって。心の中では、いつも歯を食いしばってるんだって。
迅助　子供の時、隣町のやつらに苛められたことがあるんですよ。そしたら、捷平が怒って、一緒に仕返しに行ってくれたんです。途中で雨が降ってきて、それが物凄い土砂降りで、俺は「もういいよ、帰ろう」って言ったんです。そしたら、あいつ、なんて応えたと思います？「降りそそぐ百万粒の雨さえも、俺を止めることできない」って。
佐織　うわ、まるで歌舞伎役者みたい。
迅助　俺もその時は笑っちゃいました。でも、今でも忘れられない。俺は捷平に恩があるんです。数えきれないほど。
佐織　だから、庇ってくれんたですね。
迅助　でもね、佐織さん。俺は土方先生にも恩があったんです。その人に向かって、俺は剣を向けたんです。

迅助と佐織が去る。

慶応四年四月十日朝。柴田辰次郎宅の離れ。
みいとミツがやってくる。ミツは風呂敷包みを持っている。

みい　話って、何ですか？
ミツ　みいさんに渡したいものがあって。（包みを差し出して）これなんですけど。みい
ミツ　（受け取って、中を見て）綺麗。この着物を私に？
昔、母からもらったものを仕立て直したんです。今度は自信作ですよ。時間はたっぷりありましたから。
みい　（中を見て）本当だ。縫い目もとっても綺麗。
ミツ　見直してくれましたか？
みい　ええ。でも、こんな大切なもの、もらっちゃっていいんですか？
ミツ　大切だから、もらってほしいんです。総司がお世話になっているお礼です。
みい　（頭を下げて）ありがとうございます。
ミツ　みいさん。総司を頼みますね。
みい　どうしたんですか、改まって。

そこへ、ときがやってくる。

とき　みい、沖田さんを呼んどいで。珍しいお客が来たんだ。

そこへ、土方と銀太夫がやってくる。二人とも洋式の軍服を着ている。みいが去る。

土方　ミツさん、いらしてたんですか。

ミツ　お二人とも、どうなさったんです、そのお姿は。

土方　近頃は、幕軍も薩長軍も、洋式の軍服が増えてきましてね。で、我々も仕方なく。変ですか？

ミツ　いいえ。ただ、ちょっと見慣れないだけで。

銀太夫　正直に言ってあげてください。全然似合ってないって。

ミツ　そう言う三鷹さんもどうかと思いますけど、大切なのは着る人の気持ちですからね。

とき　私は見る人の気持ちも考えた方がいいと思いますよ。じゃ、私は仕事に戻りますんで。

土方　いや、ときさんもここにいてください。大事な話があるんです。

とき　今さら何のお話です？　米をいっぱい送ってきただけで、一度も訪ねてこなかった方が。

そこへ、沖田とみいがやってくる。

沖田　土方さん、三鷹さん、何ですか、その格好は。

土方　総司、頼む。おまえだけは似合うと言ってくれ。

沖田　そいつは困ったな。ちなみに、近藤先生にはなんて言われました？　笑われ

土方　たんじゃないですか？
銀太夫　まだ見せてねえ。近藤さんは今、会津へ行ってるんだ。
土方　え？
沖田　（銀太夫を制して）俺たちも後を追いかける。まずは宇都宮を押さえて、次は日光を目指すつもりだ。
土方　新選組は戦い続けるんですね？
とき　当たり前じゃねえか。
土方　土方先生。大事なお話っていうのは、それですか？
とき　我々は今晩、江戸を出立します。しばらくは戻れそうにないので、ご挨拶をと思いまして。どうか、沖田をよろしく頼みます。
銀太夫　しばらくって、どれくらいですか？　一体この戦はいつになったら終わるんです。
とき　何なんですか、あなたは。さっきから偉そうに。
銀太夫　私だけじゃなくて、江戸中のみんなが言ってることですよ。江戸城は明日、官軍に引き渡されるんですよね？　それなのに、まだ戦を続けるなんて。私には、意地を張ってるだけにしか見えません。
土方　端から見れば、そうでしょう。しかし、私が戦うのは、意地のためではない。誠のためです。
みい　誠？
土方　武士の仕事は主君をお守りすること。これは源頼朝公の時代から続く、武士の決まりです。たとえ賊軍の汚名を着せられようと、最後まで主君を守り抜く。それこそが真の武士ではありませんか。
沖田　ときさん。私も土方さんと同じ気持ちです。

とき　そうですか。私は、死んじまったら、誠も何もないと思いますけどね。
銀太夫　同感です。
沖田　三鷹さん、何か言いましたか？
銀太夫　いいえ、別に。土方先生、そろそろ隊へ戻りましょう。
ミツ　その前に、私からもご挨拶をさせてください。私も明日、江戸を発つことになったんです。
みい　本当ですか？　どうして。
ミツ　夫に帰国命令が出たんです。藩主の酒井様に従って、庄内へ行くようにと。
とき　命令なら仕方ないけど、明日っていうのはずいぶん急な話ですね。
ミツ　私も昨日、聞かされたんです。もっと早く知っていれば、毎日でもここへ来たのに。
沖田　相変わらず大袈裟だな。体が治ったら、私の方から会いに行きますよ。
ミツ　そうですね。でも、庄内は遠いから。
みい　大丈夫です。私もお供しますから。
沖田　みいさんが？
とき　（みいに）あんたがついていったって、何の役にも立ちゃしないよ。
みい　そんなことないです。熱が出たら、看病します。
ミツ　わかりました。二人が来るのを楽しみに待っています。
土方　では、我々はこれで失礼します。
沖田　土方さん。立川さんはどうしてますか？　最近、顔を見てませんが。
土方　あいつは新選組を辞めた。
沖田　辞めた？　嘘でしょう？
銀太夫　残念ですが、本当なんです。

沖田　一体何があったんです。何か、取り返しのつかない失敗でもしたんですか？
土方　そうじゃねえ。あいつは、俺たちとは別の道を選んだんだ。
沖田　信じられません。あの立川さんが別の道だなんて。
土方　あいつのことは忘れろ。一日でも早く、体を治して、会津へ来るんだ。
銀太夫　沖田さんは重要な戦力なんです。首を長くして、待ってますからね。
ミツ　総司、しっかり養生するんですよ。向こうへ着いたら、すぐに文を書きますから。
とき　（みいに）じゃ、私は皆さんをお見送りしてくるからね。
沖田　土方さん、三鷹さん、姉上、どうかお元気で。
土方　おまえの方こそ、さっさと元気になれ。会津で待ってるからな。
沖田　はい。

土方・銀太夫・とき・ミツが去る。

沖田　参ったな。とうとう私一人になってしまった。
みい　本当は、土方先生についていきたいんでしょう？
沖田　当たり前じゃないですか。でも、私はここにいます。土方さんの足手まといにはなりたくないですから。

沖田・みいが去る。
昭島宅。
昭島がやってくる。後から、佐織がやってくる。

佐織　お出かけですか？
昭島　ああ。
佐織　今日も勤め口を探しに？
昭島　なんだ、その目は。俺が嘘をついているとでも言うのか？
佐織　あなたはいつも相手の目を見て、話をする人です。でも、この五日というもの、ほとんど私と目を合わせようとしない。
昭島　参ったな。さすがに子供の頃からの付き合いだ。
佐織　それじゃ。
昭島　実は、勤め口は既に見つかっている。ただ、向こうに条件をつけられてな。その条件を果たさないと、雇ってはもらえないんだ。
佐織　その勤め口というのは、昨夜、表にいらした方と関わりがありますか？
昭島　おまえ、話を聞いていたのか？
佐織　いいえ。でも、あなたを呼んでほしいと言われた時、言葉に訛りがあるのに気づきました。あれは西国の訛りですよね？
昭島　詳しいことは帰ってから話す。
佐織　いいえ、今、話してください。あの方はどこのどなたなんですか？
昭島　聞こえなかったのか。俺は帰ってから話すと言ったんだ。

そこへ、迅助がやってくる。

迅助　捷平、佐織さんに本当のことを話してやってくれ。佐織さんはおまえのことが心配なんだ。
昭島　心配とは？

迅助　薩長軍のやつらは大抵、西国訛りだ。佐織さんはおまえの新しい勤め口が薩長軍じゃないかと思ってるんだよ。俺は絶対に違うと言ったんだけど、どうしても直接確かめたいって。

昭島　（佐織に）俺のことを疑って、迅助に相談したのか。

迅助　違う。佐織さんが不安そうな顔をしてたから、俺が無理矢理聞き出したんだ。

昭島　佐織、おまえの推察通りだ。俺は薩長軍、いや、官軍に入る。

迅助　何だと？

昭島　迅助、おまえも入らないか？　俺が頼めば、室戸さんはうんと言ってくれる。

迅助　いきなり何を言い出すんだ。新選組にいた人間が、薩長軍に入れるわけないだろう。

昭島　それが入れるんだよ。室戸さんというのは、土佐藩の人なんだがな。東山道軍で、板垣さんの補佐をしてるんだ。でも、元々は海援隊の隊士で――――その人とはいつ知り合ったんですか？　まさか……。

佐織　甲州の戦の時だ。俺は室戸さんに斬られて、東山道軍に捕まった。その時、

昭島　仲間にならないかと誘われたんだ。もちろん、すぐに断った。すると、室戸さんはこれを見せてくれた。（と懐から紙を取り出して）坂本龍馬が書いた、船中八策だ。

迅助　（受け取って）船中八策？

昭島　これからの日本が進むべき道だ。坂本という男は、幕府や薩長よりはるかに広い視野を持っていたんだ。

迅助　（差し出して）これを見て、新選組を裏切ることに決めたのか？

昭島　（受け取って）違う。近藤が投降した時だ。新選組の局長ともあろう男が、偽名を使って延命を図ろうとした。それが俺には許せなかった。

迅助　それじゃ、土方先生が仰ったことは、全部事実だったんだな？
佐織　（昭島に）なぜ今まで隠していたんですか？
昭島　迅助が俺を信じてくれたからだ。だから、どうしても言えなかった。
迅助　（歩き出す）
佐織　迅助さん、どこへ行くんですか？
迅助　土方さんに謝りに行きます。正しいのはあの人の方だった。それなのに、俺はあの人に剣を向けた。
昭島　行くな、迅助。
迅助　止めるな、捷平。俺には俺が許せないんだ。
昭島　行くな！

昭島が刀を抜いて、迅助に向ける。

佐織　やめてください、捷平さん！
昭島　（迅助に）土方は今日、官軍に捕まる。おまえが行ったら、一緒に捕まる羽目になる。
迅助　それもおまえが手引きしたのか？
昭島　違う。これから手引きするんだ。官軍に入るための条件は、坂本を殺した下手人を見つけ出すこと。
迅助　土方先生は下手人じゃない。
昭島　いや、下手人だ。新選組の隊士だった俺が、そう証言すれば。

迅助が歩き出す。昭島が迅助の肩をつかむ。迅助が昭島の手を振り払う。昭島が迅助の

足を剣の峰で打つ。迅助が倒れる。佐織が迅助に駆け寄る。

佐織　迅助さん！

昭島　峰打ちだ。ただし、傷を打ったから、しばらくは歩けまい。

佐織　捷平さん、あなたは自分のしていることがわからないの？

昭島　佐織、おまえこそわからないのか？　俺は迅助を助けたいんだ。

昭島が去る。迅助が立ち上がる。

佐織　迅助さん、無理しないでください。

迅助　冗談じゃない。今、無理しないで、いつするんです。

佐織　でも。

迅助　捷平に教わりましたからね。降りそそぐ百万粒の雨さえも――――

佐織　迅助さん、あの人を助けてください。

迅助がうなずいて、走り出す。佐織は去る。そこへ、銀太夫がやってくる。

銀太夫　立川さんは走った。本所の昭島さんの家から南西へ三〇〇〇メートル走り、鍛冶橋の新選組の仮屯所に到着。そこで土方先生は千駄ヶ谷へ行ったと聞き、今度は西へ。しかし、傷が痛くて、思うように速度が上がらない。それでも、けっして足を止めない。立川さんを止めることは誰にもできない。

迅助が走り去る。

慶応四年四月十日昼。日枝神社近くの路上。
土方がやってくる。

土方　三鷹、何をしている。さっさと来い。
銀太夫　そう言わずに、少し休ませてください。鍛冶橋から千駄ヶ谷へ行って、今度は富岡へ。さすがの私も疲れました。
土方　すぐそこが日枝神社だ。境内の茶店で、一服するか。
銀太夫　賛成です。私、お団子が食べたいんですけど、いいですか？
土方　いや、その暇はなさそうだ。
銀太夫　え？　なぜですか？
土方　客が来たんだ。それも、俺たちの命を取りに来た客がな。

そこへ、昭島・室戸・清水・須崎がやってくる。

昭島　土方先生、その節はいろいろお世話になりました。
土方　おまえに世話をした覚えはねえ。正体を暴かれたくせに、よくのこのこと俺の前に顔が出せたな。
銀太夫　（昭島に）その人たちは誰です。あなたのお仲間ですか？

室戸　土佐藩士・室戸策太郎と申します。今日は土方殿にご用があって、参上いたしました。

土方　冗談はよせ。おまえらと話すことは何もねえ。

清水　近藤殿に関わる事柄だと言ってもですか？

土方　何だと？

清水　今、板橋の総督府では、近藤殿の処遇についての話し合いが行なわれています。直ちに打ち首にするべきか、その前に拷問を行って、罪を認めさせるべきか。

土方　罪とは何だ。

清水　元土佐藩士・坂本龍馬暗殺の罪です。

銀太夫　バカバカしい。近藤先生は坂本なんか殺してませんよ。

須崎　貴様は横から口を出すな。

土方　室戸と言ったな？　いくら近藤さんを痛めつけても、時間の無駄だ。やってもいねえことを認めるわけには行かねえからな。

室戸　ええ、私もそう思います。

銀太夫　だったら、拷問を止めてください。

室戸　だから、あなたに会いに来たのです。実は、ここにいる昭島さんが、坂本さんを殺した下手人はあなただと証言したのですよ。

銀太夫　何ですって？

土方　昭島、貴様は近藤さんを売るだけでは飽き足らず、俺まで売るつもりか。

室戸　では、罪を認めるんですね？

銀太夫　とんでもない。土方先生が下手人でないことは、私が保証します。第一、坂本が殺されたのは去年の十一月。その時、昭島さんはまだ新選組に入隊して

なかった。

昭島　おかしいな。私に、下手人は土方先生だと教えてくれたのは三鷹さん、あなたじゃないですか。

銀太夫　バカな。

清水　土方殿、貴公が罪を認めれば、近藤殿は拷問されずに済む。武士として、堂々と死ぬことができるんです。

土方　用と言うのはそれだけか。

室戸　ええ。それで、貴公のご返答は。

土方　考えるまでもねえ。もし俺が近藤さんを庇って、やってもいない罪を認めてみろ。俺は近藤さんにぶん殴られるぜ。歳、おまえ、それでも武士かと。

室戸　それでは、力ずくでご同行願うしかありません。

土方　できるものなら、やってみろ。新選組の力を思い知らせてやる。

全員が刀を抜く。そこへ、迅助が走ってくる。

迅助　土方先生！

土方　立川、何しに来た。

迅助　私は捷平を止めに――（ウッと呻き、ひざまずく）

昭島　ここまで走ってきたのか？　その足で。

迅助　刀を引け、捷平。おまえのしていることは間違っている。

須崎　死にたくなければ、ここを立ち去れ。俺たちの目的は土方だけだ。

迅助　そう言われて、素直に立ち去ると思うか？　新選組は、敵に背中を見せるわけには行かないんだ。

須崎が迅助に斬りかかる。迅助が刀を抜く。昭島と室戸が土方に、清水が銀太夫に斬りかかる。激しい斬り合い。迅助・土方・銀太夫が昭島・室戸・清水・須崎に囲まれる。

土方　立川、無理をするんじゃねえ。
迅助　でも、私がいなくなったら、二対四ですよ。
銀太夫　私は数に入れないでください。戦力になりませんから。
土方　謙遜するな。おまえだって、毎日、俺に怒鳴られながら、稽古してきたじゃねえか。
迅助　そうですよ、三鷹さん。あなただって、立派な新選組の隊士です。
昭島　迅助、もう諦めろ。新選組の命運は尽きたんだ。
銀太夫　黙れ！　おまえらごときに、新選組が負けてたまるか！

昭島が銀太夫に斬りかかる。室戸と清水が土方に、須崎が迅助に斬りかかる。激しい斬り合い。土方が清水の腕を斬る。清水がひざまずく。須崎が土方に斬りかかる。土方が須崎の肩を斬る。須崎がひざまずく。

土方　どうした。官軍の力はこの程度か。
室戸　なかなかの腕ですな。どうやら、昭島さんの証言は本当らしい。
土方　わからねえやつだな。俺は坂本なんか殺してねえ。下手人は見廻組のやつらだ。
昭島　でたらめを言うな。
迅助　でたらめを言ってるのはどっちだ、捷平。おまえはただ、官軍に入りたいだ

けだろう。

昭島　違う。俺は坂本龍馬の遺志を継ぎたい。この国を救いたいだけだ。

迅助　今の言葉を坂本さんに聞かせたいよ。きっと、べこのかあって言うだろうな。

昭島　なぜおまえにそんなことがわかる。

迅助　言ってなかったか？　俺は坂本さんに会ったことがあるんだ。

昭島　そんな話を信じると思うか？

昭島が迅助に斬りかかる。室戸が土方に斬りかかる。激しい斬り合い。室戸が土方の手を斬る。土方がひざまずく。銀太夫が土方に駆け寄る。

銀太夫　土方先生！

昭島　どうする、迅助？　子供の頃みたいに、参りましたと言うか？

迅助　敵と向かい合った時、一番大切なのは目だ。敵の動きをよく見るんだ。

昭島　おい、何をブツブツ言ってるんだ。

室戸が迅助に斬りかかる。迅助がかわす。そこへ、沖田が飛び出す。

沖田　立川さん、一！

迅助　一！

迅助・沖田が昭島・室戸に斬りかかる。以下、沖田が数字を叫び、迅助が数字の通りに刀を振る。迅助が昭島の腕を斬る。昭島がひざまずく。

迅助　（沖田に）信じられない。助けに来てくれたんですね？
銀太夫　立川さん、誰に向かって、話してるんです？
迅助　え？
沖田　立川さん、避けて！

室戸が迅助に斬りかかる。迅助がかわす。激しい斬り合い。迅助が室戸の腹を刺す。室戸が倒れる。清水・須崎が室戸に駆け寄る。

迅助　捷平、この人を医者へ連れていけ。
銀太夫　何を言うんです、立川さん。こいつらを逃がすんですか？
迅助　（昭島に）この人は海援隊の隊士なんだろう？　だったら、死なせるわけには行かない。俺は京にいた頃、坂本さんに命を助けられた。その恩返しをまだしてないんだ。
昭島　いいのか？　俺たちはおまえを斬ろうとしたんだぞ。
迅助　いいですよね、土方先生？
土方　勝ったのはおまえだ。好きにしろ。
迅助　（昭島に）さあ、行けよ。
昭島　室戸さん、立てますか？
室戸　立川さんでしたね？　このご恩は一生忘れません。
迅助　礼なら、坂本さんに言ってください。でも、言ったら、きっと怒られるだろうな。つまらん殺生をするなって。

昭島・室戸・清水・須崎が去る。

迅助　土方先生、この前は剣を向けて、申し訳ありませんでした。（と頭を下げる）土方　そのことなら、もういい。
銀太夫　（迅助に）そうですよ。あなたは私たちを助けに来てくれたんですから。
土方　総司も来てたな。
迅助　え？
土方　おまえのそばに見えたんだ。剣を振ってる総司の姿が。行くぞ、三鷹。

土方・銀太夫が去る。迅助が周囲を見回す。

迅助　沖田さん、ありがとうございました。（と頭を下げる）

柴田辰次郎宅の離れ。
ときがやってくる。

とき　（迅助に）それじゃ、土方先生は立川さんを置いてったんですか？
迅助　ええ。
とき　どこまで冷たい人なんだろう。命懸けで助けに行ったのに。
迅助　俺は土方先生に刀を向けた男です。新選組に戻る資格はありません。
とき　じゃ、このまま江戸で働くんですか？
迅助　いいえ、今日ここへ来たのは、ご挨拶をするためです。私はこれから、京へ行きます。向こうに、妹や叔父の家族がいますから。それに。
とき　それに、何です？　わかった。誰かいい人が待ってるんですね？　そうでし

ょう？

迅助　待ってるかどうかは、わからないんですが。

そこへ、みいが沖田を支えて、やってくる。沖田は刀を持っている。

沖田　立川さん、これを持っていってください。（と刀を差し出す）

迅助　沖田さんの刀を？　どこへですか？

沖田　決まってるでしょう。会津へですよ。新選組に戻るんです。

とき　でも、土方先生に追い返されるんじゃありませんか？

沖田　大丈夫です。土方さんだって、私の刀を見れば、追い返したりしませんよ。

迅助　お気持ちはありがたいですが、そんな大事なものをいただくわけには。

沖田　誰があげるなんて言いました。私が動けるようになったら、すぐに返してもらいますよ。

みい　どうして？　どうしてそこまでして、立川さんを？

沖田　私の代わりに、土方さんのそばにいてほしいんです。最後のわがままだと思って、聞いてください。

迅助　（受け取って）私でよかったら、喜んでお引きけ受けます。

沖田　そう言ってくれると思ってました。あと一つ、お願いがあるんですが。

とき　あら、さっきのが最後じゃなかったんですか？

沖田　（迅助に）もし私に返す機会がなかったら、その時はその刀を、つぐみさんに渡してもらえませんか。

とき　どなたです、つぐみさんていうのは。

迅助　私の従妹です。さっきお話しした、京に住んでる叔父の娘で、医者をやって

るんですよ。

沖田　（ときに）京にいた頃、何度か診療してもらったんです。その時のお礼を、まだしてなかったものですから。

みい　だったら、自分で渡しに行けばいいじゃないですか。

沖田　そうですね。できれば、そうしたいと思ってるんですが。

みい　できれば、じゃありません。必ずそうすると言ってください。

とき　（沖田に）つぐみさんていうのはどんな人なんですか？　さぞかし美人なんでしょうね？

沖田　ええ。まるで桜の花びらのような人です。気が強いのが玉に傷ですけど。

迅助　見てください、沖田さん。桜の蕾があんなに膨らんで。

全員が庭を見る。

沖田　本当だ。いつの間にか、そんな季節になってたんですね。

迅助　それじゃ、俺は会津へ行きます。

沖田　立川さん。土方さんを助けてあげてくださいね。

迅助　はい。

迅助が去る。反対側へ、沖田・みい・ときが去る。

銀太夫がやってくる。日誌を開く。

銀太夫　慶応四年四月十一日、遂に江戸城が薩長軍に明け渡された。同日、我々新選組は江戸を出立し、下総の鴻之台で幕軍の脱走兵たちと合流した。そこへなんと、立川さんが現れた。沖田さんから預かったという刀を見せられ、土方先生は渋々隊への復帰を許した。四月二十九日、会津に到着。閏四月二十五日、近藤先生が板橋で処刑されたという知らせが届いた。新選組隊士は全員泣いた。しかし、土方先生だけは口を固く結んで、南の空を見つめていた。慶応四年改め、明治元年十月十二日、榎本武揚先生が率いる幕府艦隊と合流し、仙台沖を出立。土方先生や立川さんと、甲板から海を眺めた。ほんの十月前は、沖田さんもいたのに。十月二十六日、箱館五稜郭に入城。明治二年四月十三日、二股口で薩長軍と交戦。よく戦ったが、二十九日、ついに退却。五月十一日、薩長軍の総攻撃が始まった。誰もが最期の時が来たと思ったが、口にする者はなかった。土方先生は一本木関門の前に立ち、「退く者は斬る」と叫んだ。その時、腹に敵の銃弾が命中。この一瞬をもってして、新選組の歴史は完全に幕を閉じた。

明治三年四月十日。丸の内にある、辰ノ口糾問所。

迅助がやってくる。

迅助　三鷹さん？　三鷹さんじゃないですか！

銀太夫　そう言うあなたは立川さん！　あなた、ここで詮議を受けていたんですか？

迅助　いや、俺は十日前に移送されてきたばかりです。三鷹さんは？

銀太夫　私は今朝です。この部屋で待つように言われて、他にすることもないから、日誌を読み返してたんです。

迅助　三鷹さん、それ、毎日書いてましたよね。

銀太夫　子供の頃からの習慣ですからね。銀太夫日誌、これが第五〇巻です。

迅助　それにしても、久しぶりだな。五稜郭で別れたのが去年の五月だから、もうすぐ一年ですよ。

銀太夫　立川さんは十日前から、ここにいるんですよね？　その割に、ずいぶん元気そうですが。

迅助　元気じゃいけませんか？

銀太夫　そう言いませんけど、辰ノ口糾問所と言えば、日本一詮議が厳しいって評判じゃないですか。拷問に耐え切れずに、亡くなった人もいるとか。

迅助　そうなんですか？　でも、俺は拷問なんかされてませんよ。

銀太夫　と油断させておいて、いきなりひどい目に遭わせるつもりなんですよ。こうして楽しくおしゃべりできるのも、今日が最後かも。

そこへ、昭島と室戸がやってくる。二人とも、洋服を着ている。

昭島　久しぶりだな、迅助。

迅助　捷平！　おまえ、無事だったのか。
銀太夫　（昭島に）見違えましたよ、昭島さん。あなた、ずいぶんご出世なさったようですね。新選組を裏切って、敵に寝返ったくせに。
昭島　お久しぶりです、三鷹さん。私は今、民部省に勤務していましてね。こちらは私の上司の室戸さんです。
銀太夫　室戸って、日枝神社の近くで襲ってきた、土佐藩士の？
室戸　我々はこの一年、あなた方の行方を探していました。ここへ移送する手続きを取ったのは、私なんです。
銀太夫　全く執念深い人たちですね、あなたたちは。
昭島　は？　私をここに移送したのは、復讐するためでしょう？　詮議と称して、鞭で叩いたり、ロウソクの火で炙ったりするつもりなんでしょう？
室戸　誤解ですよ。私たちはあなた方を助けたかったんです。
昭島　（迅助・銀太夫に）あなた方はたった今から自由の身です。どちらへ行かれても構いません。
銀太夫　それはつまり、私たちを釈放してくれるってことですか？
室戸　本当はもっと早くそうしたかったのですが、なかなか居所がわからなくて。
迅助　ありがとうございます、室戸さん。
室戸　いや、お礼を言うのはこちらの方です。私がこうして今でも生きていられるのは、立川さんにおかげなんですから。
昭島　三鷹さんはこれからどうするつもりですか？
銀太夫　まずはお風呂に入りたいですね。それから、仕事を探します。
迅助　また、和算の先生ですか？

銀太夫　いや、この日誌を読んでいるうちに、自分は書くことが好きなんだって気づきましてね。これからは、物を書く仕事がしたい。（室戸に）別に構いませんよね？

室戸　どうぞ、ご自由に。

昭島　迅助、おまえはどうする。

迅助　まずは千駄ヶ谷へ行って、それから京へ。その先のことはまだ考えてない。

昭島　よかったら、俺と一緒に働かないか？　室戸さんも、ぜひ来てほしいと言ってるんだ。

室戸　（迅助に）明治のご一新と言えば聞こえはいいが、新政府は薩摩と長州に牛耳られようとしています。しかし、我々は坂本さんの遺志を継いで、日本に議会を設立したい。あなたは生前の坂本さんをよくご存じのようだ。私たちと共に、新しい日本を作りませんか。

迅助　悪いけど、今の俺には、自分の目の前のことしか考えられない。答えは待ってもらえませんか。

室戸　いいですとも。いくらでも待ちましょう。

迅助　捷平、佐織さんは元気にしてるか？

昭島　もうすぐ二人目が産まれるんだ。

迅助　おめでとう、捷平。佐織さんにも、おめでとうと伝えてくれ。

銀太夫　立川さん、行きましょう。

昭島　迅助、いろいろ済まなかった。許してくれ。（と頭を下げる）

迅助　何言ってるんだよ、捷平。俺たちは生きてる。だから、こうしてまた会えた。それだけで十分じゃないか。

昭島　迅助。

迅助　またな、捷平。

迅助・銀太夫が去る。

室戸　全く見事な男ですね。あれほど真っ直ぐな男は見たことがない。

昭島　ええ。私の自慢の友です。

昭島・室戸が去る。

柴田辰次郎宅の庭。

ときがやってくる。

とき　みい、みいはいるかい？

そこへ、みいがやってくる。箒を持っている。

とき　いるなら、すぐに返事をしなよ。全くいくつになっても愛想のない子だね。

みい　私、掃除中なんですけど。

とき　そんなの、後でいいよ。珍しいお客が来たんだから。ほら。

そこへ、迅助がやってくる。沖田の大刀を持っている。

みい　立川さん。本当に立川さんなんですか？

迅助　お久しぶりです、みいさん。

（みいに）ついさっき、辰ノ口の糾問所から釈放されたんだってさ。その足で、ここへ走ってきたんだよ。沖田さんに会いに。

みい　沖田さんに？

とき　あんたから話しておあげ。

迅助　どういうことでしょう。

みい　立川さん、沖田さんは亡くなりました。一昨年の五月三十日に。

迅助　それじゃ、俺たちが江戸を発って、すぐに。

とき　近藤先生はその一月前に処刑されたんですけどね、沖田さんには知らせませんでした。知らせたって、気を落とすだけだし。

みい　（迅助に）だから、沖田さんは毎日、そこの縁側で、会津の方を眺めてました。いつか、必ず追いかけるんだって。

迅助　（見て）桜だ。

とき　おやおや、今まで気づいてなかったんですか？　昨日辺りから満開になりました。どうです、キレイでしょう？

迅助　ええ、とても。

みい　立川さん、それは沖田さんの刀ですよね？

迅助　ええ。沖田さんに言われた通り、ずっと俺が持ってました。俺は、最後の戦まで、土方先生のそばにいたんです。

みい　ありがとう、立川さん。

迅助　え？

みい　沖田さんの代わりです。土方さんを助けてくれて、ありがとう。

迅助　いいえ、俺は沖田さんの刀に助けられました。沖田さんのおかげで、今日まで生きてこられたんです。

とき　それで、これから先はどうするんですか？
迅助　俺は……。
みい　俺は？
迅助　走り続けます。あの人たちの分も。

遠くに、沖田と土方が現れる。沖田が笑う。土方が笑う。桜の花びらが、二人の上に舞い落ちる。

＜幕＞